

畿内の家形石棺

和田晴吾

【要約】 家形石棺は畿内の古墳時代後期における普遍的な遺物の一つである。本稿はその家形石棺を型式、石材、分布地域等より分析し、各要素が有機的に結びついた一つの個性ある石棺群を抽出するとともに、それらを「型」として捉え、その関係を追求することのなかに六、七世紀における畿内豪族層の政治的動向を窺おうとする基礎的作業である。その結果、畿内の家形石棺は五つの「型」と三つの「石棺群」として捉えられ、その動向は三つの画期を経ていることが明らかとなった。すなわち、五世紀後半における奈良盆地東部での家形石棺の発生、六世紀前半における畿内各地域での家形石棺製作の開始、および六世紀末から七世紀初頭における家形石棺の斉一化の始まりがそれである。そこで、各時期における各「型」の関係を追求し、その意義を求めると、それらは推古朝、大化改新を経て律令体制へと向かう当時の政治的動向を葬送儀礼の面に反映したものと推察されるにいたった。

史林 五九卷三号 一九七六年五月

一 はじめに

家形石棺とは古墳時代中期後半以後に製作・使用の多用化する石製の棺であり、その基本的な形態は蓋が屋根形で、身は箱形を呈するものとされている〔水野一九五九〕。その研究史は古く、すでに明治三二年頃には「屋根形石棺」の名で知られ〔八木一八九九〕、大正二年には高橋健自氏によって「家形石棺」の名が与えられたが〔高橋一九三二a〕、以後今日まで、この石棺を資料として考察の加えられたおもなテーマは、つぎの五点に要約することができる。すなわち、家形石棺は(a)編年論、(b)生死観念論—家葬、(c)地域論、(d)階層論、(e)手工工業生産論等の研究各分野において重要な資料として

取り扱われてきたのである。

まず、小林行雄氏は昭和二六年の論攷「小林一九五一」において、(a)―(c)の諸問題についてつぎのごとき総括的な見解を発表した。

要約すれば、家形石棺は家形埴輪を母体として生まれたが、家形埴輪が魂去来の依代としてあったのに対し、家形石棺は死後の世界における肉体の永住を具体化したものとしてあった。したがって、家形石棺の出現によって家葬の思想の存在がはじめて肯定されるのであり、この共通の思念が畿内においても九州においても、屋根形の蓋をもった石棺を作り出す基盤をなした。しかし、その後の家形石棺の変遷過程において、九州では屋根形の蓋よりも棺身の変化に重点がおかれ、刳抜式でも組合式でも、その棺身の四方を閉じた箱形のものから妻入横口式―平入横口式―石屋形へと変化し、その方向は明らかに家屋の形状への接近を強く企画していた。これに対し、畿内の家形石棺は蓋の頂部の平坦面をしだいに広げる方向へと一貫した動きを示し、一種の箱形のもの製作としての意識を高めつつあったという。

家形石棺は、ここにはじめてその文化史的位位置を獲得し、研究は新たな一段階を画したのである。

その後、(a)および(c)については、山本清氏が山陰の家形石棺を集成することにより、鳥根県東部(出雲地方)では、九州の家形石棺に由来すると考えられる平入横口式家形石棺がきわめて特殊に発達することを指摘し、畿内、九州に対する第三の地方の存在を明らかにした〔山本一九七〇〕。また、佐田茂・高倉洋彰氏らは九州の家形石棺の集成と型式分類を試み、九州的な家形石棺の特性と石棺型式にみる地域色とを明らかにした〔佐田一九七二〕。

一方、赤松啓介氏や丸山竜平氏らは家形石棺の偏在的なあり方に注目し、(e)の古代的手工業生産の一部門として石工集団のあり方を解明しようと試みた〔栗山一九三四―五、赤松一九六五、丸山一九七一〕。特に丸山竜平氏は、畿内の家形石棺の刳抜式と組合式との間に分布差を認め、この差をもつて石棺製作者集団の差とし、さらに、石棺石材に花崗岩の利用が見られないことより、凝灰岩を処理する石工集団と、切石横穴式石室など花崗岩を処理する石工集団との相違を考え

るなど、古代石工集団のあり方に興味深い見解を展開した。しかし、両氏の場合にはそれまでの研究成果、特に編年的研究の成果が十分に生かされてきたとはいえず、若干の疑問をさしはさむ余地が残された。

ところがごく最近にいたり、間壁忠彦・間壁葎子氏は、まったく新しい方法として、X線回折法による石棺石材の同定を試み、瀬戸内海水系を媒介に石棺が頻繁に持ち運ばれている事実を明らかにするとともに、その移動の中に古代豪族間の政治的行為の反映を窺うという方法を提唱した〔間壁一九七四、逸見一九七四〕。その結果は今日までに「石棺研究ノート」として三度にわたって報告されたが〔間壁一九七四a・b、一九七五c〕第三回目的の「長持形石棺」はすぐれた論考となっている。

本稿は、以上のごとき諸先学の有意義な研究成果を踏まえつつ、畿内の家形石棺を主として型式、石材、分布地域の三点より分析し、各要素が有機的に結合した、一つの性格をもつ石棺群を抽出することを基本的な目的とする。なぜなら、それは特定の地域で製作された特定の製作品を意味するものと考えられるのであり、この点が明らかになって、はじめて工人集団のあり方、あるいはその集団を支配し、その製品を彼ら自身のためにのみ用いた豪族層の動向が把握されうるものと考ええるからである。

戦後、わが国の考古学界は後期古墳の研究において、遺跡と遺物の編年にすぐれた成果をあげるとともに、この時期を画す主たる要因である群集墳をして古代家族の台頭を実証するものであるとの性格規定に成功した^②。その結果、群集墳の研究は共同体の戸籍として資料化する方向に努力が向けられ、群集墳を含む古墳群は特定氏族の勢力の消長を示すとともにその権力構造のあり方を窺う資料とされ、遺構や遺物は各古墳の階層性を見きわめる手段として重点がおかれてきた^⑤。しかし、そこでは古墳群と古墳群の関係、すなわち、一定のまとまりをもった地域の限定や、あるいは地域と地域との関連性の追求は必ずしも活発であったとは言えない^⑥。そういった意味で、家形石棺の検討は一遺物よりする古墳、および古墳群の相互関連のしかたの追求として一定の意義をもつであろう。

- ① たとえば須恵器では横山浩一「手工業生産の発展」『世界考古学大系』三 一九五九、櫛崎彰一「後期古墳時代の諸段階」『名古屋大学文学部十周年記念論集』一九五九、田辺昭三『陶器古窯址群』一（『平安学園研究論集』）一九六六、馬具では小野山節「馬具と乗馬の風習」『世界考古学大系』三 一九五九、同「日本発見の初期の馬具」『考古学雑誌』五二—一 一九六六、また横穴式石室では白石太一郎「畿内の後期大型群集墳に関する一試考」『古代学研究』四二・四三 一九六六などにその成果が著しい。

- ② 藤沢長治「古墳時代研究のあゆみ」『日本の考古学』四 一九六六
近藤義郎編『佐良山古墳群の研究』一九五二がその端緒になったと、

二 家形石棺以前の石棺

ところで、わが国において大型石材を丁寧加工した石棺が用いられるようになったのは、もちろん家形石棺に始まるわけではない。その初現は古墳時代前期後半、ほぼ四世紀後半まで遡り、当時、たぶん朝鮮半島よりもたらされた大型石材処理技術が急速に全国に伝わった結果、各地で割竹形や舟形の割抜式石棺（以下舟形石棺と総称する）、あるいは長持形の組合式石棺が盛んに製作されるようになったのである（小林一九六五）。

ところが、その分布のあり方は一様ではなく、この両者の間には際立った分布差が認められる。すなわち、舟形石棺は西九州（熊本県中心）、香川県、島根県東部、京都府北部、福井県、群馬県東南部、福島県東部など全国各地に分布しており、^①それぞれ在地の石材を利用して製作されたと推定される。それに対し、長持形石棺は奈良県、大阪府、兵庫県南部を中心に分布するものの、岡山県から京都府南部にかけてのそれは、大阪府柏原市松岳山古墳例（小林一九六七）や岡山県邑久郡花光寺山古墳例（梅原一九三七）^②など祖型的な例を除けば、他のいずれもが兵庫県南部加古川流域に産出する竜山石を利用しているのであり（間壁一九七五C）、石棺型式の斉一性から見ても、加古川流域で製作され持ち運ばれたも

われている。

- ③ 最近では水野正好『甲賀郡甲西町狐栗古墳群調査概要』（滋賀県文化財調査概要）一九六八、同「群集墳と古墳の終焉」『古代の日本』五一 一九七〇などがある。

- ④ 京都大学考古学研究会『嵯峨野の古墳時代』一九七一などがある。

- ⑤ 森浩一・石部正志「後期古墳の討論を回顧して」『古代学研究』三〇 一九六二、今井堯・近藤義郎「群集墳の盛行」『古代の日本』四一九七〇。

- ⑥ 野上丈助「摂河泉における古墳群の形成とその特質」『考古学研究』六三、六四 一九七〇などはこの方面にとり組んだ労作である。

のと推定されるのである。ただ、九州の一部の地域や京都府北部、群馬県東南部などごく一部の地域においては在地石材の利用が確認されているのであるが〔間壁一九七五C〕、その数はきわめて少なく、しかも、舟形石棺と混在したり、あるいはその分布地域の周辺部に所在しているのである。

したがって、舟形石棺と長持形石棺にみる分布差の本質的な意味については将来問われなければならないものとしても、少なくとも、大型石材の利用がほとんど石棺のみに限られたこの時期における石材処理技術の伝播は、舟形石棺をつくることとより密接に結びついていたものと推定される。この点は、後に畿内における家形石棺の発生と、その技術的系譜を考えるにあたって参考になるものと思われる。

さて、以上のような全般的な状況を踏まえて、今回問題とする畿内のそれを概観してみると、先にも指摘したとおり、当時の畿内の石棺の主体はあくまで長持形石棺にある。舟形石棺が奈良県一例（後述する三輪型刳抜O・二型式a₁類を加えても四例）、大阪府二例、京都府一例の僅かに四例^⑤で、しかも、各地よりもたらされたものと推定されるのに対し、長持形石棺は奈良県九（五）^⑥例、大阪府九（三）例、京都府一例と圧倒的に多く、しかも、香川県綾歌郡鷺ノ山石と花崗岩よりなる松岳山古墳例を除けば、いずれも竜山石製と考えられる〔間壁一九七五C〕。そして、前者が比較的周辺の古墳に採用されているのに対し、後者の多くは大王陵をはじめとする中心部の大型前方後円墳に採用されているのである。したがって、長持形石棺は畿内文化を代表する一指標とされ〔小林一九六一〕、葛城氏が深く関与した当時の大和政権と強く結びつく石棺型式と理解されているのである〔間壁一九七五C〕。

ところが、大型前方後円墳と結びついた長持形石棺も五世紀後半以後には、前者の衰退にともない漸次消滅の方向に向かうのであるが、畿内において二上山石材の開発が始まり、続いて各地域で家形石棺の製作が開始され出すのはまさにこの時期においてのことなのである。

① 同志社大学考古学研究会『同志社考古』一〇 一九七三に舟形石棺

の全国的な地名表が掲載されている。

② これまでも松本雅明「古墳文化の成立と大陸」『古代アジアと九州』

『九州文化論集』一(一九七三)九州の舟形石棺地名表掲載、西川

宏・六車恵一他「瀬戸内」『日本の考古学』四 一九六六、高掘勝喜

・吉岡康暢「北陸」『日本の考古学』四 一九六六、尾崎喜左雄「横

穴式古墳の研究」一九六六など多くの論攷や報告書で、それぞれ在地

の石材を利用した石棺として触れられてきたが、間壁忠彦・間壁護子

氏の前掲論文に各地域の石材の分析結果が述べられている。

③ 梅原末治「備前行幸村花光寺山古墳」『近畿地方古墳墓の調査』二

(『日本古文化研究所報告』四) 一九三七には凝灰岩となっているが、

石棺型式からいっても不詳。

④ そのほかに竪穴式石室の天井石に加工した石材が用いられている例

が少なからずある。その場合、石室内部に石棺が埋納されていること

三 家形石棺の分析と「型」の設定

《一》 刳拔式石棺(第1・2図)

それでは、つぎに家形石棺の分析に移ろう。その場合、畿内の家形石棺には刳拔式石棺とそれを上回る数の組合式石棺があり、両者の間に分布差の認められる事実はすでに多くの人の説くところである。それゆえ、順序としては、まず刳拔式石棺を型式・石材・分布地域の三点より分析し、先の方法が妥当なものかどうかを検討し、つぎに組合式石棺へと進みたいと思う。

〈一〉 型式分類

ところで、刳拔式石棺に関しては、すでに小林行雄氏により編年の基礎が打ち立てられており(小林一九五一)、今日まで妥当なものとして評価されてきている。本稿も基本的にはそれに従うものであるが、型式分類に関してはさらに細分

が多いが、必ずしもそうでないこともある。特に前者のような場合には古墳築造過程における石工集団の果した役割の大きさを知る。

⑤ 京都府綴喜郡八幡茶臼山古墳例(阿蘇榕結凝灰岩製)〔梅原末治「山城綴喜郡茶臼山古墳と其発見物」『考古学雑誌』六一九 一九一六〕、

奈良市不退寺石棺(北九州唐津湾岸の砂岩製)〔佐藤虎雄「佐保・佐

紀地域」『奈良市史』考古編 一九六八〕、大阪府柏原市安福寺石棺

(鷺の山石)〔梅原末治「玉手安福寺境内割竹形石棺」『大阪府史跡名

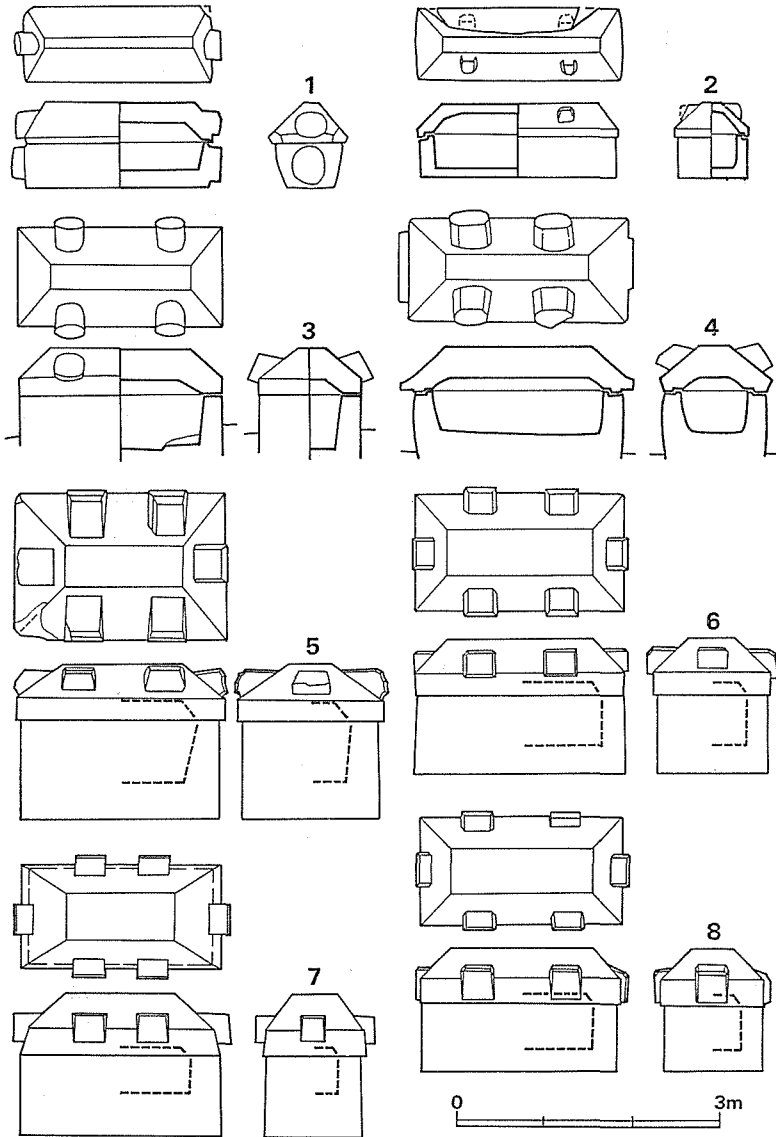
勝天然記念物調査報告』五 一九三四〕、大阪府堺市野々井二木山

古墳例(不明)〔藤沢一夫「野々井二木山古墳の調査」『大阪府の文

化財』一九六二〕。石材の分析は間壁忠彦氏による。

⑥ (一)内は古文獻等で予測されているものの数である。

畿内の家形石棺（和田）



第1図 畿内刳抜式家形石棺 1

1. 長持山古墳1号棺 2. 長持山古墳2号棺 3. 権現堂古墳1号棺
 4. 鴨稻荷山古墳 5. 都塚古墳 6. 金山古墳1号棺 7. ツボリ山古墳1号棺 8. 金山古墳2号棺

の必要が認められる。その場合、本稿では分類の主眼を蓋にみられる突起の数と形態に求め、前後・左右の順にこれを数えて石棺の型式名とする。したがって、畿内の「典型的な」〔水野一九五九〕家形石棺で、刳抜式の身と、前後短辺に各一個、左右長辺に各二個の突起を有す蓋をもつ例は「刳抜一・一・二・二型式」となる。ただ、畿内の家形石棺では前後・左右それぞれで突起数を違える例がないため、これを略して「刳抜一・二型式」とする。

また、家形石棺編年の基準となる蓋頂部の平坦面に関しては、蓋の全体幅に対する割合を平坦面指数（平坦面幅÷蓋の全体幅×一〇〇）としてこれを指数化する。

① 刳抜一・〇型式

この型式は蓋の形態、および突起の形態・位置などよりさらに二類に分類される。

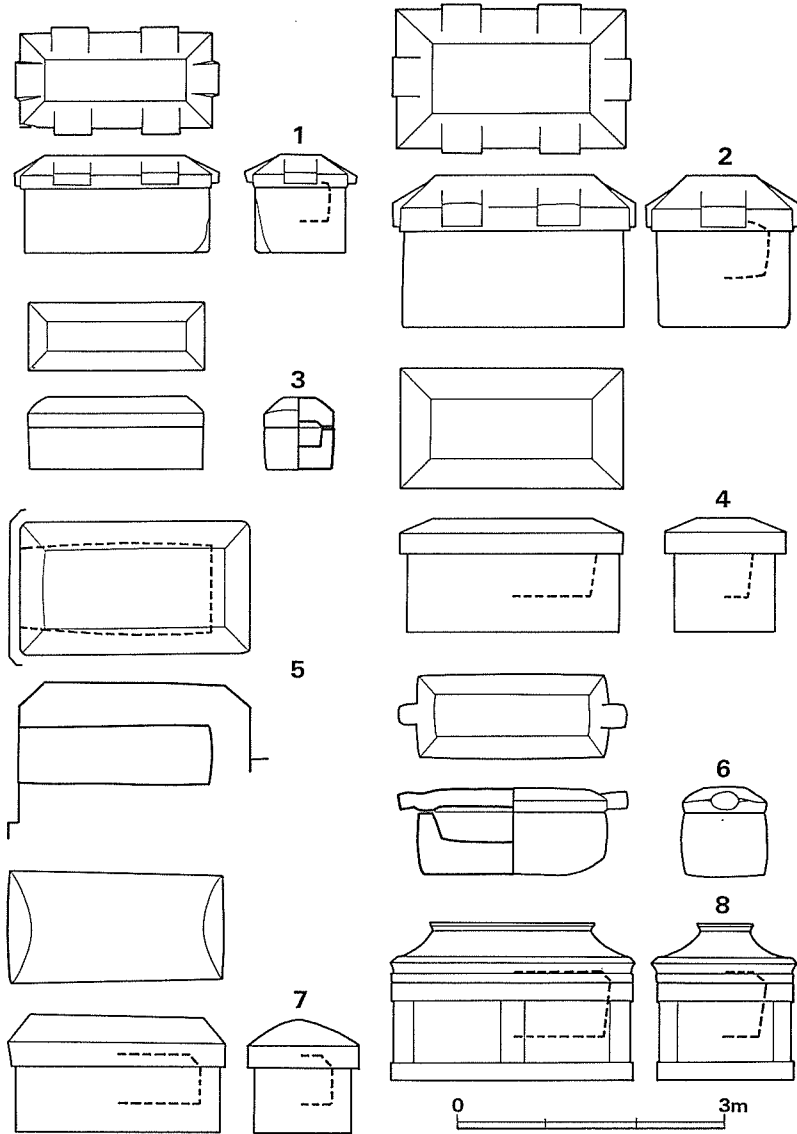
a類（第1図1）は大阪府藤井寺市唐櫃山古墳例〔北野一九六二〕と同長持山古墳一号棺（北棺）〔梅原一九三四〕を標識とするもので、前者の蓋は頂部が丸く終り（ a_1 類）、後者のそれは僅かな平坦面をなしている（ a_2 類）。ともに蓋と身の前後に太い円柱状の突起をもち、身は底部に向かうほど狭くなるなど、多分に舟形石棺の要素を残している。

これに対してb類（第2図6）は、蓋の平坦面指数が五〇を越え、突起は蓋の垂直面に下りてくるもので、身は完全な箱形を示し、突起はない。京都府長岡京市光明寺一号棺〔堤一九六八〕・大阪府茨木市耳原古墳二号棺〔梅原一九三五〕などがこれにあたる。

② 刳抜〇・二型式

この型式も主として突起の形状より二分される。

a類（第1図2）は断面円形、または隅丸方形の小さく華奢な突起が蓋の斜面より斜上方に向かって付いているもので、蓋斜面の左右長側面は少し丸味をもち、身はいまだ底部に向かうにつれて僅かに幅狭くなっている。蓋の頂部は丸く終るものと指数二〇以下の幅狭い平坦面をなすものがあり、それにより、さらに a_1 類・ a_2 類と細分する。 a_1 類は奈良県桜井



第2図 畿内刳抜式家形石棺 2

1. 平尾石棺 2. 艸墓古墳 3. 飛鳥石棺 4. 小谷古墳 5. 輕墓小口山古墳 6. 耳原古墳 2号棺 7. 二子塚古墳北墳 8. 葛蒲池古墳 1号棺

市兜塚古墳例〔天沼一九一三〕、 a_2 類は奈良県天理市東乗鞍古墳一号棺〔佐藤一九一六〕などである。

b類(第1図3・4)とするものも、断面円形に近い突起が蓋の斜面より斜上方に突出している、という点ではa類と同じであるが、突起が太く頑丈で、先端が蓋の頂部平坦面の高さにまで近接している点に特徴があり、蓋の各稜線が直線化し、身は完全な箱形をなす。平坦面指数は約一五から三〇近くを示し、指数の増加にしたがい突起は徐々に矩形化する。奈良県北葛城郡笛吹神社古墳例〔坪井一九一三、天沼一九一四、泉森一九七二〕、同御所市権現堂古墳一号棺〔佐藤一九一六、網千一九五七a〕などがこれにあたる。

③ 刳抜一・二型式

畿内の「典型的な」家形石棺の型式とされるもので、矩形化した突起と箱形の身をもつ最も定型化したものであるが、平坦面の広狭と突起の位置・形態に見落としがたい差が認められる。

まず、a類(第1図5)は刳抜〇・二型式b類の突起が矩形化したものである断面長方形の太い突起が、蓋の斜面に付いているもので、平坦面指数は三〇前後から四〇未満を示すものである。

これに対し、平坦面指数が四〇を越え、突起が蓋の垂直面におりてくると、突起の形態は断面正方形の方向に定型化が進むものと、より断面長方形に定型化するものとに分化する。それゆえ、前者をb類(第1図6―8)、後者をc類(第2図1・2)とする。なお、b類の一部には石棺身の妻部に横口をもつものが現われるために、その有無によりb類は b_1 類(無)・ b_2 類(有)と区分する。^④

代表例はa類が奈良県高市郡都塚古墳例〔網千一九六八〕、 b_1 類が大阪府南河内郡金山古墳一・二号棺〔小林一九五三〕、 b_2 類が大阪府富田林市お亀石古墳例〔高橋一九一三b〕、c類が奈良県桜井市卯墓古墳例〔天沼一九一四、梅原一九三五〕である。^④

④ 刳抜無突起型式

この型式は蓋の形態を中心に、まず刳抜一・二型式から突起を取り除いただけの屋根形の蓋のものをa類(第2図3-5)とし、特殊で個体差の大きい形態を示す蓋のものをb類(第2図7・8)とする。また、a類は身の妻部に横口をもたないか、もつかでa₁類・a₂類と細分する。a類の平坦面指数は四〇余りから七〇を越えるものまで存在する。

代表例はa₁類が奈良県橿原市小谷古墳例〔佐藤一九一三〕、a₂類が大坂府南河内郡松井塚古墳例〔大阪府教委一九五八、藤沢一九六二〕、b類が奈良県橿原市菖蒲池古墳一・二号棺〔上田一九二七〕である。

以上、畿内の刳抜式家形石棺は四型式九類、さらに細かくは四型式一三類に型式分類されるのである。

二〇 編年観

では、各型式の編年観についてつきに触れておこう。

まず、刳抜一・〇型式a類では長持山古墳一号棺に衝角付冑、挂甲、短甲、鞍金具・輪鏡・轡・杏葉などの馬具類、鉄刀、鉄矛、鉄鏃など多数の遺物の伴出していることが注目されるが〔小林一九六二〕、その甲冑、および馬具類は五世紀の中葉、ないしは後半に編年されている^⑤。このことは同古墳が允恭天皇陵に治定される前方後円墳の陪塚的位置に存在することと関連するのであるが、他の一例を出土した唐櫃山古墳も同じく允恭天皇陵の陪塚群中にあり、やはり衝角付冑、短甲、鉄鏃、轡、杏葉、金銅製三輪玉、金銅製帯金具、直弧文鹿角製刀子などを伴出し〔北野一九六二〕、ほぼ同時期のものと推定される。

ところで、両石棺に共通する特徴としては、形態のほかに退化した竪穴式石室内に埋納されていることと、蓋と身の結合に印籠蓋の技法をとっていることを指摘できる。ところで、この二つの要素は畿内ではともに古式な家形石棺の特徴であり、前者は他に刳抜〇・二型式a類^⑥、後者は刳抜〇・二型式a類と同b類の一部のみ見られるものである。したがって、二要素がともに備わった刳抜〇・二型式a類は刳抜一・〇型式a類ときわめて近似した時期の所産と推測される。刳抜〇・二型式の石棺は形態学的にはa₁類からa₂類へと変化したものと考えるが、より新しいa₂類に属す東乗鞍古墳一号棺

(指数一五)が横穴式石室内に遺存し、六世紀前半の年代観を与えられていることは(白石一九六六、清水一九七一—二)妥当なところである。なお、東乗鞍古墳一号棺は横穴式石室内に埋納された家形石棺としては最古の型式を示している。

刳抜〇・二型式b類では、後述のごとく、奈良盆地南部より滋賀県高島郡に搬出されたと推定する鴨稻荷山古墳例が、垂飾付金製耳飾・金銅製冠・沓・三輪玉ほか多数の装身具、馬具類、刀剣類、および田辺昭三氏による編年(田辺一九六六)のTK一〇型式に近い須恵器などと伴出しており〔浜田一九二三〕、六世紀前半から中葉にかかる頃の所産と考える。ところで、この石棺は平坦面指数二五を示し、蓋の前後に扁平な板状の突出部をもつ点で刳抜〇・二型式b類でも後出の部類にあたり、刳抜一・二型式a類への過渡的な形態を示すものである。したがって、刳抜〇・二型式b類は六世紀前半から一部中葉にかけてのものであり、刳抜一・二型式a類は六世紀中葉以後のものとして推測される。

一方、刳抜一・二型式a類がより定型化した段階を示すb類では最も古い形態の金山古墳一・二号棺(指数四〇と四二)が、TK二〇九型式並行の須恵器(無蓋高杯)と伴出しており、ほぼ六世紀末頃がa類とb類の時期を区切る一線と推定される。また、b類では型式的にも新しいお亀石古墳例(指数四六)は、石棺の外部施設を構成していた平瓦が近接する新堂廃寺創建時の瓦と共通することから、七世紀前半の年代観を与えられている〔坪井一九六一〕。

刳抜一・二型式c類では、畿内に分布するこの型式の中で最も新しい部類の艸墓古墳例(指数五二)が、切石横穴式石室内に存在することで著名である。ところで、白石太一郎氏によればこの石室は「岩屋山亜式」とされ、それに先行する「岩屋山式横穴式石室」はほぼ七世紀の第2四半世紀頃に位置づけられるとされている〔白石一九七三〕。したがって、「岩屋山亜式」の石室内に存在する艸墓古墳例はそれと同時期か、やや降る七世紀中葉頃とするのが妥当であろう。そして、このc類の出現時期は刳抜一・二型式b類の出現とほぼ同じ六世紀末頃と推定したい。なぜなら、b・c類はともにa類の型的発展上で分化したものであり、さらに後述のごとく、c類と同一型式の蓋をもつ組合式石棺の出現が六世紀末には見られるからである。

ところで、「岩屋山式」の石室といえは小谷古墳の石室がその数少ない一例として知られているが、その内には刳抜無突起型式 a 類の家形石棺 (指数五〇) が存在する。したがって、艸墓古墳例との対比から、刳抜無突起型式 a 類は刳抜一・二型式 c 類の存続期間中に出現したとの予測が成り立つ。小谷古墳例よりも小さな平坦面指数を示す奈良県桜井市弁天社古墳二号棺 (指数四三)〔網干一九五九〕や大阪府羽曳野市飛鳥石棺 (指数四四)〔岸本一九三三〕などは六世紀末、ないしは七世紀初頭にまで遡る可能性が高い。他方、平坦面指数のより大きい部類では指数五五を示す松井塚古墳例があり、石室や墳丘が大化の薄葬令に従って築造されたものと推定されるところから、「築造年代も大化二年を降ること余り遠くないもの」と考えられている〔大阪府教委一九五八〕。この型式にはほかに奈良市押熊石棺〔奈良檜原一九七一〕のごとく指数七〇を越えるものから、家形石棺の系譜上にはあっても屋根形をなさなくなるものまで存在し、その終末の時期は明らかにしえないが、ほぼ七世紀いっばい存続するものと考えられる。

刳抜無突起型式 b 類でも年代を明らかにしうるものはほとんどないが、石室の構造、漆喰の利用法〔安田一九七二〕などより、ほぼ七世紀中葉から後葉にかけてのものとして推定する。

かつて小林行雄氏は畿内の刳抜式家形石棺の形態変化を突起の数・位置・形態、および蓋頂部の平坦面の広狭に捉え、これを編年したが〔小林一九五一〕、以上の考察はその見解が基本的に正しいことを示すとともに、刳抜式家形石棺全体の型式変遷における各個体の位置は、ほかならず平坦面指数がこれを最も端的に示していることを明らかにしていると考えられる。したがって、平坦面指数と年代観との対応というかたちで以上をまとめておこう。その場合、蓋の全体幅に対する平坦面幅の割合が四分の一 (指数二五)、三分の一 (同三三)、二分の一 (同五〇) と明確な比率をもつものが最も注目されるのであるが、それぞれ六世紀前葉と中葉、六世紀中葉と後葉、および七世紀前葉と中葉を分かっ頃のものと考えられるのが最も妥当である。また、指数約一〇前後が五世紀と六世紀の、指数四二、四三程度が六世紀と七世紀の境を分かっ頃のものとして推定される。各型式の年代観については第 2 表に一括したが、それらは以上の考察より帰納されたところである。

〈三〉型式と石材

以上見てきた畿内の刳拔式家形石棺の型式変遷は、一部を除いてぎわめて滞のない発展を示している。しかしながら、各型式と石材との対応、あるいは分布の状態等を検討してみると、これら刳拔式家形石棺全体を支配する流れの背景には大きな断絶が横たわっているものであり、すべての刳拔式石棺は型式を包み込むかたちで大きく四つの群に統合されるのである。

では、まず最初に石棺型式と石材との対応を見てみたい。

畿内の家形石棺の石材に関しては、以前より、奈良県と大阪府の境に位置する二上山のいわゆる「松香石」の利用が想定され〔関野一九二五、川勝一九五七〕、他に若干異質なものの存在も予想されていた。^⑨しかし、石棺石材とその産地との同定問題が解決されるためには、自然科学の分析技術をもち込んだこと二、三年の間壁忠彦・葭子夫妻の業績〔間壁一九七四 a・b、一九七五 a・b・c〕をまたねばならなかった。氏らはX線回折法による岩石の同定より、畿内には少なくとも兵庫県加古川下流域の竜山石、香川県綾歌郡鷺の山石、九州阿蘇熔結凝灰岩、佐賀県唐津湾岸の砂岩、畿内二上山白色系凝灰岩（松香石）、同二上山ピンク凝灰岩の六種類の岩石の利用を確認し、①畿内では家形石棺に先行する舟形石棺や長持形石棺には前四種の石材が利用されており、松岳山古墳例を除く長持形石棺にはいずれも竜山石が用いられていること、②二上山石材の開発は家形石棺の段階になって、二上山ピンク凝灰岩―二上山白色系凝灰岩の順に開発されたこと、③家形石棺には二上山の二種の石材とともに阿蘇熔結凝灰岩、および竜山石が利用されていることを明らかにした。本稿での石材の分析は、氏らの業績に負うところが大きいのであるが、畿内の家形石棺に利用された四種の石材はその「特徴的性格」〔間壁一九七四 a〕にしたがい肉眼的に区別することが可能であることから、筆者自身が独自におこなった肉眼観察の結果によるものである。^⑩

その結果、対象石棺中知見に入るものほとんどは前記四種の石材よりなることが追認されたわけであるが、他に組合

式石棺の中に若干白色、ないしは淡青灰色で時に小礫をまじえた軟質の砂質凝灰岩の存在が指摘でき、いわゆる「松香石」とこれら砂質凝灰岩との間にも若干のバラエティのあることが判明した。

ところで、二上山付近の凝灰岩質石材には鹿谷寺跡付近に分布する鹿谷火山岩と上・中・下部屯鶴峯層中の凝灰岩、火山系のピンク凝灰岩、および玉手山凝灰岩が存在する〔笠間一九五六、松下一九七一〕。松脂岩屑の黒い斑点を含む、いわゆる「松香石」は鹿谷火山岩をさすのであるが、この岩石と同時に異質なものとされる下部屯鶴峯層も松脂岩屑を含み、風化すると識別が非常に困難とされている〔笠間一九五六〕。しかも、前述の砂質凝灰岩は上部屯鶴峯層の露出する屯鶴峯に類例を見るのである。したがって、今回はこれら二上山周辺の白色系の凝灰岩の細分はさげ、一括して「二上山白色凝灰岩」とし、二上山ピンク凝灰岩に対比することとした。なお、玉手山凝灰岩の石棺への利用例は横穴内での造り付け石棺^⑩を除けば目に触れることはなかった。したがって、分類した石材は二上山白色凝灰岩、同ピンク凝灰岩、竜山石、阿蘇熔結凝灰岩の四種類であり、不明は二、三を数えるにすぎない。

そこで、これらの石材と石棺型式との対応関係をみてみると、まず刳抜一・〇型式a類は二例とも阿蘇熔結凝灰岩である。続いて刳抜〇・二型式ではa類がいずれも二上山ピンク凝灰岩よりなっており、b類が二上山白色凝灰岩よりなることと著しい差を示す。二上山白色凝灰岩製と推定されるものはこのほかに、b類の型式の発展上に考えられる刳抜一・二型式a・b類、および刳抜無突起型式a・b類である。これらの石材はほとんどいずれもが典型的な「松香石」である点は、今回同じ二上山白色凝灰岩として一括した小礫まじりの砂質凝灰岩が、おもに奈良盆地西部を中心とする組合式石棺にみられるという現象と対比されるべきものである。しかし、この点は石材の詳細な分類と二上山周辺の石材採掘問題として解決を将来にもちこしておきたい。

一方、竜山石を利用する石棺型式には、まず刳抜式か組合式かは不明確だが〇・二型式b類と推定復原された一例(奈良県北葛城郡狹井城山古墳付近の石棺〔泉森一九七三〕)があり、つづいて刳抜一・二型式a・c類、刳抜一・〇型式b

類、および刳抜無突起型式 a・b 類がある。

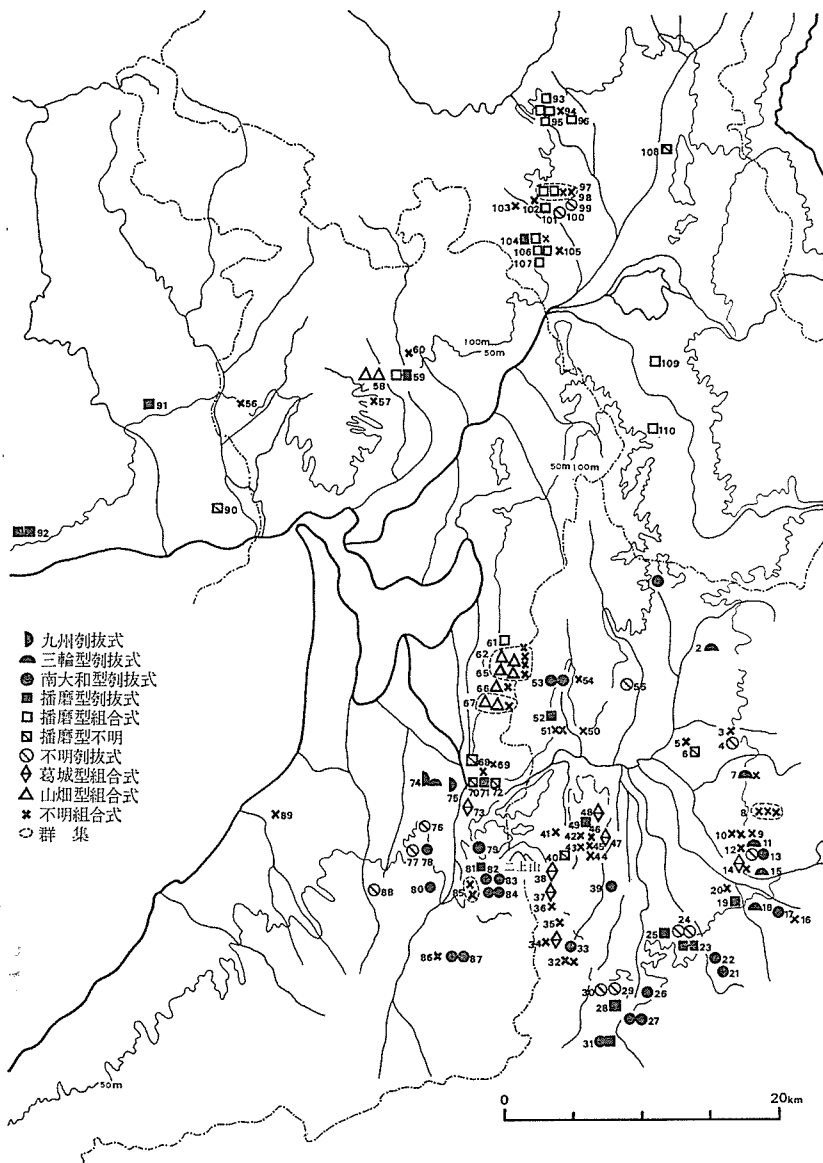
したがって、阿蘇熔結凝灰岩、二上山ピンク凝灰岩、同白色凝灰岩、および竜山石の四種の石材を利用する刳抜式家形石棺は、互いに型式的な関連性があるというものの、少なくとも「類」の段階において、それぞれ独自の形態をとることが明らかとなった。その中で、二上山白色凝灰岩製の石棺と竜山石製のそれとは特に密接な関係にあり、この点では同時期の畿内の組合式石棺や他地方のいわゆる畿内的な家形石棺と対比した場合において、最大の特徴となるものである。

しかも、家形石棺が最も定型化する段階、すなわち、刳抜一・二型式 a 類が b 類と c 類とに分化する段階において、b 類は二上山白色凝灰岩、c 類は竜山石と明確に分離する点が注目される。なぜならば、この現象は両石棺製作地の自立化がこの段階において成しとげられたことを暗示するものであり、後述のごとく竜山石製の石棺が急増するのまささにこの時期にあたるからである。他の型式においては二上山白色凝灰岩製と竜山石製の石棺との間には明確な型式差は見出しえないが、畿内の刳抜横口式石棺のほとんどが二上山白色凝灰岩製で、竜山石製のものが見られないこと、あるいは、刳抜無突起型式 b 類の主体は竜山石製石棺にあり、特に葛蒲池古墳一・二号棺のごとく石棺蓋の四隅の稜に「そり」をもつものは竜山石製のみ特徴的であることなどは指摘することができる。また、畿内では西端部にしかみられないものであるが、神戸市梅林石棺〔吉井一九一三、本山一九五三〕のごとき棺の全長が一メートルをやや越えるにすぎない小型刳抜式石棺も竜山石製のみに見られるものである。^⑦ このようなことは刳抜一・二型式の段階における石材による型式差の顕在化の内容が、単純な形態を示す刳抜無突起式以後にも続いて行くことを推定させるものである。

〈四〉分布（第 3・5 図）

畿内には約二〇〇例に近い家形石棺が見られ、奈良盆地北部、大阪平野南西部（和泉地域）・北部（淀川以北摂津地域）、京都盆地南部に分布が希薄なほかにいずれの地域もかなりの濃度をもって分布している。しかし、すでに指摘したごとく石棺身の型式によって分布に差があり、刳抜式石棺は主として奈良盆地南部や大阪平野南部を中心に分布している。こ

畿内の家形石棺（和田）



第3図 畿内家形石棺分布図（番号は第1表の番号と一致する）

第1表 畿内家形石棺地名表

番号	古墳名	所在地	墳形	型	石棺型式	指数	石材	文献
奈良県								
1	(押 熊)	奈良市秋篠町押熊		南大和	剝抜無突 a	71	白	98
2	野 神	〃 南京終町南細井	(前)	三 輪	剝抜0・2 a ₁	なし	ビ	55, 61
3	別所大塚	天理市別所町	前		(組合)			59
4	鐘子塚	〃 別所町	前		(剝抜)			59
5	星 塚	〃 上之庄塚山	円		組合		白	57
6	(荒 蒔)	〃 荒蒔八の坪		播 磨	1・2 c	54	竜	93
7	東 乘 鞍 ₁ 2	〃 乙木町北山	前	三 輪	剝抜0・2 a ₂	15	ビ	74
					組合		白	
8	竜王山(群)	〃 柳本町黒岩			組合(多数)		白	78, 107
9	珠城山1号	桜井市穴師玉の山	前		組合無突		白	62
10	珠城山3号	〃 穴師玉の山	前		組合(2例)			91
11	慶運寺裏	〃 箸中		三 輪	剝抜		ビ	
12	馬 塚	〃 管中南浦			組合			3
13	弁天社2	〃 茅原堂の前		南大和	剝抜無突 a	43	白	
14	三輪狐塚 ₁ 2	〃 茅原狐塚	(方)	葛 城	組合0・4		白	8
					組合(他1)		白	
15	(金 屋)	〃 金屋ミロク谷		三 輪	剝抜0・2 a ₁	なし	ビ	93
16	越 塚	〃 粟原越塚	円		組合			92
17	天王山	〃 倉橋赤阪	方	南大和	剝抜1・2 b ₂	46	白	33, 73
18	兜 塚	〃 浅古	前	三 輪	剝抜0・2 a ₁	なし	ビ	11
19	艸 墓	〃 谷艸墓	方	播 磨	剝抜1・2 c	52	竜	12, 30
20	稲荷山1号	〃 谷			組合			59
21	都 塚	高市郡明日香村阪田	(円)	南大和	剝抜1・2 a	28	白	10, 100
22	石舞台西北	〃 明日香村島の庄		南大和	剝抜		白	103
23	葛 蒲 池 ₁ 2	橿原市五条野町葛蒲池	(円)	播 磨	剝抜無突 b		竜	19
				播 磨	剝抜無突 b		竜	
24	見瀬丸山	〃 見瀬町	前		(剝抜無突)			125
25	小 谷	〃 鳥屋町小谷	(円)	播 磨	剝抜無突 a	47	竜	72
26	宮 塚	高市郡高取町市尾	前	南大和	剝抜0・2 b	23	白	100

畿内の家形石棺 (和田)

番号	古墳名	所在地	墳形	型	石棺型式	指数	石材	文献
27	権現堂1	御所市樋野権現堂	円	南大和	刳抜0・2b	24	白	5, 47
28	新宮山2	◇ 稲宿	円	播磨	刳抜1・2a	34	竜	5, 11
29	穴神塚	◇ 條	(円)		刳抜1・3	(37)		101
30	(條南)	◇ 條	(円)		(刳抜1・2)			93
31	水 泥 ¹ 2	◇ 古瀬	円	南大和	刳抜1・2b ₁	45	白	9, 11
				播磨	刳抜1・2c	46	竜	
32	兄川底	北葛城郡新庄町山口			組合(2例)			6
33	笛吹	◇ 新庄町笛吹	円	南大和	刳抜0・2b	16	白	17, 96
34	(西の山)	◇ 新庄町山口		葛城	組合0・4		白	11, 17
35	二塚	◇ 新庄町寺口	前		組合			20
36	平林	◇ 当麻町兵家	前		組合			63
37	茶山	◇ 当麻町当麻	(円)	葛城	組合0・4			76
38	櫻山	◇ 当麻町首子	(円)	葛城	組合0・3		白	58
39	(専立寺)	大和高田市内本町		南大和	刳抜0・2b	27	白	7
40	(狐井城山)	北葛城郡香芝町狐井		播磨	(刳抜)0・2b	27	竜	16
41	藤山	◇ 香芝町北今市			組合		白	4
42	御坊山1号	◇ 香芝町瓦	(円)		組合(3例)			82
43	御坊山2号	◇ 香芝町瓦	(円)		組合			83
44	安倍山4号	◇ 広陵町安倍	円		組合(2例)			82
45	安倍山5号	◇ 広陵町安倍	円		組合(2例)			82
46	安倍山6号	◇ 広陵町安倍	円		組合			82
47	(浄土寺)	◇ 広陵町安倍		葛城	組合0・3		白	93
48	高塚	◇ 河合町佐味田	(円)	(葛城)	組合(0・4)			90
49	牧野	◇ 広陵町三吉	円	播磨	刳抜1・2a	約35	竜	59
50	御坊山2号	生駒郡斑鳩町竜田			(組合)無突			15
51	鳥土塚	生駒郡平群町西宮	前		組合(2例)		白	93
52	西宮	◇ 平群町西宮	円	播磨	刳抜(無突)		竜	30
53	ツボリ山 ¹ 2	◇ 平郡町梨本	円	南大和	刳抜1・2b ₁	41	白	109
				南大和	刳抜			
54	三里	◇ 平郡町	前		組合		(白)	44
55	割塚	大和郡山市矢田町東山	(円)		刳抜0・2			60

番号	古墳名	所在地	墳形	型	石棺型式	指数	石材	文献
大阪府								
56	鉢塚	池田市鉢塚	円		組合			30
57	見付山	茨木市上穂積			組合			89
58	南塚 1 2	◇ 宿久庄	前	山畑	組合		白	45
				山畑	組合		白	
59	耳原 1 2	◇ 耳原毛受野	円	播磨	組合1・2a	34	竜	22, 30
				播磨	刳抜1・0b	51	竜	
60	塚脇12号	高槻市服部夕畑	方					102
61	松本塚	東大阪市出雲井町	円	(播磨)	組合		竜	
62	山畑8号	◇ 四条町山畑		山畑	組合			
63	山畑26号	◇ 四条町山畑		山畑	組合		白	106, 110
64	山畑33号	◇ 四条町山畑	(円)		組合(2例)			
65	山畑48号 1 2 3	◇ 四条町山畑			組合		白	105
				山畑	組合		白	
				山畑	組合		竜	
66	愛宕塚 1 2	八尾市大竹	円		組合			35, 36
				山畑	組合		白	
67	高安 (大窪) その他	◇ 郡川	(円)	山畑	組合		白	35, 80
					組合(多数)			
68	(瑠璃光寺)	柏原市山の井		播磨	(1・2c)	54	竜	42
69	太平寺2号	◇ 安堂町	円		組合			34
70	(鳥坂寺)	◇ 高井田		(播磨)	1・2c	49	(竜)	2
71	平尾(群) 1 2	◇ 高井田		播磨	刳抜1・2c	43	竜	29
					組合			
72	青谷	◇ 青谷		播磨	1・2c	40	竜	21
73	東原わか山	◇ 玉手町	円	葛城	組合		白	29
74	長持山 1 2	藤井寺市美陵町沢田	円	(九州)	刳抜1・0a ₂	15	阿	29
				三輪	刳抜0・2a ₂	20	ビ	
75	唐櫃山	◇ 美陵町沢田	帆立	(九州)	刳抜1・0a ₁		阿	51
76	軽墓小口山	羽曳野市古市町軽墓		(南大和)	刳抜無突a ₂	(71)		48
77	六つ塚の1	◇		(播磨)	刳抜1・2c	(60)		23

畿内の家形石棺（和田）

番号	古墳名	所在地	墳形	型	石棺型式	指数	石材	文献
78	徳 楽 山	◇ 蔵の内	(円)	南大和	刳抜無突 a ₂		白	49
79	(飛 鳥)	◇ 飛鳥	(円)	南大和	刳抜無突 a ₁	44	(白)	46
80	お 亀 石	富田市中野		南大和	刳抜1・2 b ₂	46	白	87
81	(磯長小裏)	南河内郡太子町太子		播 磨	刳抜無突 b		竜	49
82	松 井 塚	◇ 太子町山田	方	南大和	刳抜無突 a ₂	55	白	40, 111
83	仏 陀 寺	◇ 太子町山田	方	南大和	刳抜無突 a ₂	55	白	49
84	二子塚 1号 2号	◇ 太子町山田	方	南大和	刳抜無突 b		白	50
			方	南大和	刳抜無突 b		(白)	
85	一須賀 W1 その他	◇ 河南町東山	円		組合0・2	29	白	37, 39
			円		組合(多数)		白	
86	お 旅 所 北	◇ 河南町水分			組合1・2	50	白	69
87	金 山 1 2	◇ 河南町芦生谷	双円	南大和	刳抜1・2 b ₁	40	白	69
				南大和	刳抜1・2 b ₁	42	白	
88	(狭 山 池)	◇ 狭山町			刳抜			84
89	百舌鳥45号	堺市上野芝町			組合		白	124

兵 庫 県

90	(岡 院)	尼崎市岡院		播 磨	無突 a ₁		竜	
91	中 山 寺	宝塚市	(円)	播 磨	刳抜1・2 c	46	竜	28
92	梅 林 (群) 1 2	神戸市東灘区		(播磨)	刳抜無突 a ₁		(竜)	123, 130
				播 磨	刳抜無突 a ₁	80	竜	

京 都 府

93	(後宇多前)	京都市右京区(伝奈良)		播 磨	組合1・2 c	64	竜	14
94	丸 山 1 2	◇ 右京区嵯峨	円	播 磨	組合0・2	43	竜	52
				播 磨	組合1・2 c	40	竜	
95	大覚寺3号	◇ 右京区嵯峨	円	播 磨	組合		竜	14
96	広 沢	◇ 右京区嵯峨	円		組合1・2 c	43		108
97	福 西 2 号	◇ 右京区大枝	(円)	播 磨	組合無突 a ₁	53	竜	112
98	福 西 (群) 1 2	◇ 右京区大枝	(円)	(播磨)	組合1・2 c	(49)	(竜)	24
			(円)	播 磨	組合1・0 b	56	(竜)	112
99	来 迎 寺	向日市物集女町			刳抜, 組合			14
100	西 垣 内	◇ 寺戸西垣内			刳抜			53

番号	古墳名	所在地	墳形	型	石棺型式	指数	石材	文献
101	芝山	向日市寺戸芝山			組合無突 a ₁	(68)		26
102	石見上里	京都市右京区大原野	円		組合			77
103	(大原野)	〃 右京区大原野			組合			52
104	(光明寺) 1 2	長岡京市粟生西城の内		播磨	刳抜1・0b	53	竜	24, 97
				播磨	組合1・2c	60	竜	
105	葉師堂	〃 今里葉師堂		播磨	組合		竜	53
106	(長法寺)	〃 長法寺山の下の		播磨	組合		竜	53
107	(寂昭院)	〃 奥海印寺		播磨	組合		竜	53
108	(阿古屋)	京都市東山区六波羅		播磨	1・2c	60	竜	24, 47
109	(寺田)	城陽市寺田		播磨	組合		竜	131
110	堀切6号	綴喜郡田辺町藤堀切	横穴	播磨	組合無突 b		竜	88

では、石棺の型式と石材との対応関係が明らかになったことより、各型式ごとの分布を述べる煩を避け、同一石材よりなる石棺の群としてそれぞれの分布を略述しよう。

まず、阿蘇熔結凝灰岩製の二例はいずれも大阪平野南部の古市古墳群中に所在し、允恭天皇陵の陪塚と推定される古墳より出土している。

一方、二上山ピンク凝灰岩製の石棺は、今日、畿内に六例が確認されているが、うち五例までが奈良盆地東辺に分布していることが注目される。^⑩ただ、一例のみは大阪平野南部の長持山古墳にあり阿蘇熔結凝灰岩製の石棺と並存している。このことは畿内における家形石棺出現の問題を考える上できわめて暗示的である。

また、二上山白色凝灰岩製の石棺は奈良盆地南部、および大阪平野南部の石川流域に集中しており、他に奈良盆地の西部や北部に若干分布している。ところで、前二者と比べて比較的存続期間の長かった二上山白色凝灰岩製のものは、この分布を編年に照し合せてみるときわめて著しい分布の差を示すのである。すなわち、刳抜一・二型式 a 類までのものはいずれも奈良盆地南部を中心に分布しているが、b 類以後は大阪平野南部にも進出し分布を最大に広げる。しかし、平坦面指数が五〇を越える七世紀中・後葉には大阪平野南部の磯長谷と羽曳野丘陵の一部にはほとんどが収束してしまうのである。したがって、二上山白色凝灰岩製の石

棺の出現地域は奈良盆地南部とするのが妥当であり、後になんらかの理由で大阪平野南部に分布の中心を移したと推定されるのである。

これに対し、竜山石製の石棺は刳抜一・二型式a類までの段階では、奈良盆地の南部と西部に僅か三例の確例しかないことが、まず注目される。ところが、刳抜一・二型式c類以後になるとその数は徐々に増加し、奈良盆地南部や大阪平野南部を中心に畿内各所に点在するようになる。すなわち、竜山石製の石棺は比較的奈良盆地南部に集中するが、二上山の二石材の石棺ほど特定の地域に集中的でないことに特色があり、奈良盆地南部では二上山白色凝灰岩製石棺が見られなくなったあとも存続するのである。ところで、竜山石製の石棺といえば石材産地のある兵庫県加古川下流域を中心にしたきわめて数多くの家形石棺が分布していることが注目される〔栗山一九三四―五、赤松一九六五〕。実見した範囲では石棺の型式はいずれも畿内の中に納まるものであり、しかも、兵庫県高砂市天磐舟石棺（一・二型式a類）〔武藤一九三三〕を除く他はいずれも刳抜一・二型式c類以後のもので、畿内の石棺編年に従う限りそれらはほとんどが六世紀末以後のもので考えられる。すなわち、竜山石製のほとんどは七世紀代の製作にかかるものであり、長持形石棺消滅以後、竜山石の開發はしばらく停滞していたといわなければならない。

以上、各石材を利用した石棺の分布を述べてきたが、その中にみられた分布の時間的な変化については後にその意味を追求することとして、いまはいずれもが分布の中心をもつこと、およびその範囲外に分布するものは中心からの距離とはあまり関係なく存在するということの二点に注目しておきたい。この点は九州に産出する阿蘇燧結凝灰岩製の石棺も例外でないことは後述のとおりである。それゆえにこの分布のあり方こそが石棺の製作地を明示し、石棺移動の背景を暗示していると理解することができるのである。

〈五〉「型」の設定（第2表）

以上、畿内の刳抜式家形石棺について型式、編年、石材、分布等を考察してきたのであるが、われわれはここにおいて、

第2表 型式・石材・地域の対照表

	型	型式	石材	分布中心地域	時期
刳 拔 式 石 棺	(九州)	1・0 a	阿	大阪南部	5 c 後半
	三輪型	0・2 a ₁	ビ	奈良東部	5 c 後半—6 c 前葉
		0・2 a ₂	ビ		
	南大和型 (白)	0・2 b	白・(竜)	奈良南部	6 c 前葉—同中葉
		1・2 a	白・竜	奈良南部	6 c 中葉—同後葉
		1・2 b	白	奈良・大阪南部	6 c 末 —7 c 前葉
		1・2 c	竜	奈良・大阪南部	6 c 末 —7 c 中葉
		播磨型 (竜)	1・0 b	竜	大阪・京都北部
	無突起 a		白・竜	奈良・大阪南部	7 c 前葉—同中・後葉
無突起 b	白・竜		奈良・大阪南部	7 c 中葉—同後葉	
組 合 式 石 棺	播磨型	刳拔と同	竜	京都北部	6 c 中葉—7 c 中・後葉
	葛城型	0・3	白	奈良西部	6 c 前葉—7 c 前葉
		0・4	白		
	(東大和)	(不詳)	白	奈良東部	6 c 中葉—7 c 前葉
	山畑型	無突起	(白)	大阪東部	6 c 前葉—7 c 前葉
(石川)	刳拔と同	白	大阪南部	6 c 中葉—6 c 末	

それらの要素がきわめて有機的に結びついた四つの石棺群を指摘することができるようになった。すなわち、それらは、①大阪府藤井寺市の二例の阿蘇熔結凝灰岩製石棺、②奈良盆地東部を中心に分布する二上山ピンク凝灰岩製石棺、③奈良盆地南部に出現し、その後大阪平野南部に分布を移す二上山白色凝灰岩製石棺、および④奈良盆地南部のほか畿内の各地に点在し、兵庫県南部加古川流域にきわめて濃密に分布する竜山石製石棺である。したがって、その分布の中心地域より名をとって、後三者を前より順に「三輪型」、「南大和型」、「播磨型」の各石棺と呼ぶことにしたい。

また、阿蘇熔結凝灰岩製の石棺に関しては、岡山県赤磐郡小山谷墳〔梅原一九二四〕や香川県観音寺市丸山古墳〔西川一九六六〕に類例をみるほか、熊本県を中心とする西九州に顕著な、いわゆる「屋根形棺蓋舟形石棺」〔佐田一九七二〕とつながるものと考えられる。ゆえに、ここではあえて「型」をもうけず「九州刳拔式石棺群」としておきたい。

すなわち、ここにおける「型」とは素材（石材）と製作品の形態（型式）と需要のあり方（分布）とが一つに結びついた、他と区別されるべき個性をもつ石棺群を捉えたものである。したがって、この「型」の設定によって、はじめて各「型」のそれぞれに一つの個性をもつ石工集団とそれを利用した人々（主として畿内豪族層）の存在を推定することが許されるものと考ええる。たとえば、三輪型の石棺は奈良盆地東部の石棺被葬者、それはいずれもその地域の有力豪族層であるが、彼らによって組織された石工集団が二上山ピンク凝灰岩を用いて製作した石棺であるというふうには推定するのである。同様に、播磨型や九州劔拔式石棺は兵庫県加古川流域、あるいは九州で製作され畿内に搬入された石棺と考えるのである。したがって、各「型」の消長はそのまま石工集団の動向を表わしているということができるのであり、間接的には彼らを組織し、その石棺を自らのためにのみ利用した豪族層の動向を反映しているものと考えることができるのである。しかしながら、三輪型の場合には一石工集団がそのまま一石工組織といった観が強いけれども、他のいずれもがそうであるとは限らない。場所を異にするいくつかの石工集団が巨大な権力のもとに一つに組織され分業形態をとっている場合も予想されなければならないからである。

話は若干先へ進みすぎたが、以上の点は後に再び触れるとして、ここでもともどり各「型」の存続時期を見ておくと、九州劔拔式石棺群は五世紀後半、三輪型は五世紀後半から六世紀前葉、南大和型と播磨型とは六世紀前葉から七世紀後半と推定される。ただ、播磨型は六世紀代には少なく、その主体は六世紀末ないしは七世紀初頭以後にあることを指摘しておきたい。²⁰

《二》 組合式石棺（第4図）

それでは、畿内の家形石棺の過半数以上を占める組合式石棺の場合はどうであろうか。この問題に迫るには、組合式石棺のほとんどの場合において、組合式なるがゆえに各部材が四散し、各個体の完全なる姿を把握しがたいという困難に直

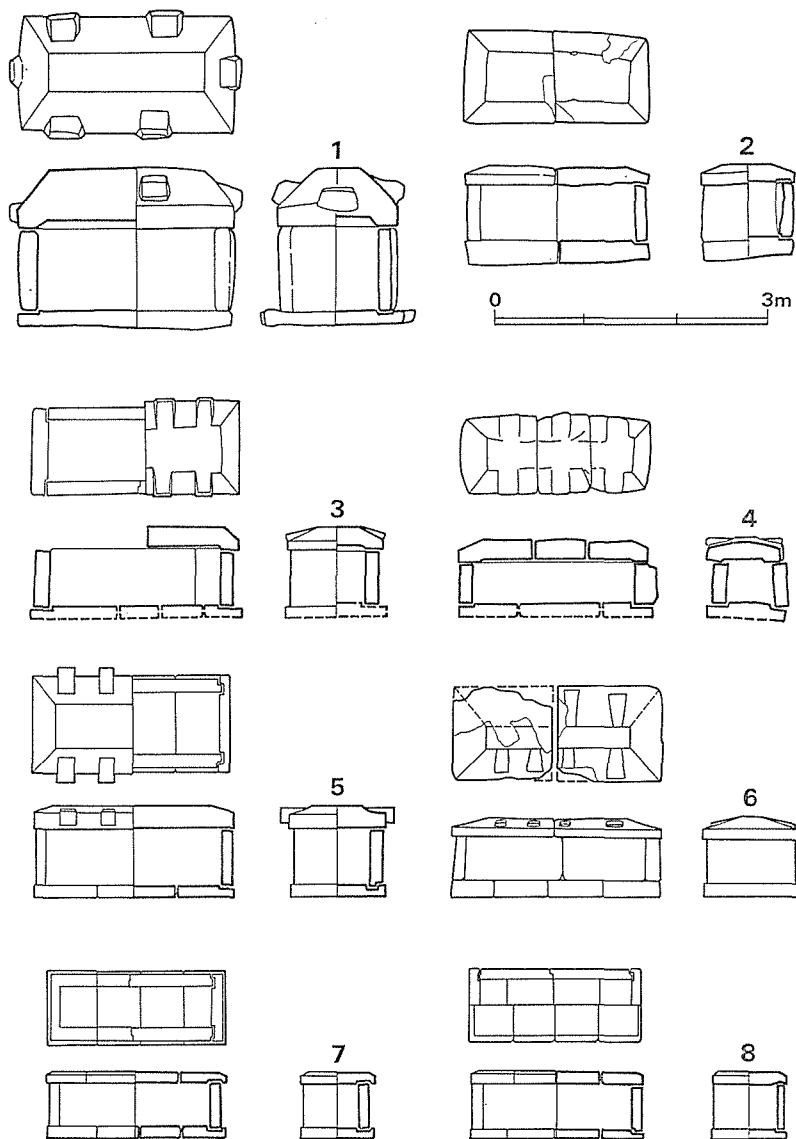
面しなければならぬ。したがって今回は、まず、刳拔式石棺と同じ方法によって「型」を設定しうるだけの実体をつかみえたものを報告し、続いて、できるだけ多くの石棺部材を考察に組みこむために石棺各部材の結合技法を問題にしたいと考える。

（一）播磨型組合式石棺（第4図1・2）

まず、刳拔式石棺の諸型式との対比から話を進めて行くと、身は組合式であっても蓋は刳拔式石棺のそれと酷似し、蓋のみでは刳拔式か組合式かを断定したい一群の組合式石棺が分布している。それらのうちで実見しえたものは、後述の僅かな例を除けばいずれもが竜山石製であり、同一石材よりなる播磨型刳拔式石棺の諸型式を踏まえている^②。しかも、その分布の中心はやはり兵庫県南部の加古川流域に求められる。したがって、これらを「播磨型組合式石棺」と呼ぶことにする。竜山石を用いる播磨型には刳拔式、組合式の両者が存在するわけである。しかし、畿内における両者の分布には大きな差が認められ、組合式石棺は京都盆地北部を中心に分布し、奈良盆地にはほとんど見られない点が注目される^③。大阪府茨木市耳原古墳一号棺（梅原一九一三、一九三五）は厚い蓋の斜面より、不定型な突起が斜上方に突出する、指数三四の組合一・二型式a類のものであるが、播磨型組合式石棺としては最も時期の遡りうる例であり、刳拔式石棺の編年観に照せば六世紀中葉から後葉にかかる頃の所産と推定される。しかし、畿内はもちろん加古川流域においてもこれに直統する確例はなく、先に述べた刳拔式石棺の状況と同様、その主体の登場は六世紀末、ないしは七世紀初頭までまたなければならなかったと推定される。

京都盆地北部ではこのあり方を反映したごとく、京都市丸山古墳一・二号棺^④（組合〇・二型式・指数四四、組合一・二型式a類・指数四〇）〔京大考古研一九七一〕の示す六世紀末以後に少なくとも一五例以上の組合式石棺と一例以上の刳拔式石棺が分布し、七世紀中・後葉に及ぶものと推定される。なお、京都盆地の家形石棺はいずれも竜山石製と見られ〔安藤一九七五〕、二上山系統の石材を利用するものは一例も知られていない。

畿内の家形石棺（和田）



第4図 組合式家形石棺

1. 南塚古墳1号棺 2. 福西2号棺 3. 茶山古墳 4. 櫛山古墳
5. 三輪狐塚1号棺 6. 西の山石棺 7. 山畑8号墳 8. 高安大
甕石棺

〔二〕葛城型組合式石棺（第4図3―6）

奈良盆地では組合式石棺が盆地の東西に分布し、刳拔式石棺の密集する南部と際立った対照を示しているが、それは分布にとどまらず石棺の形態とも関連し、組合式石棺には刳拔式石棺に対応する型式が確認できないところに最大の特徴がある^②。

全体に石棺蓋の残存例が少ないいきりもあるが、今日、盆地の組合式石棺の特徴的な形態として指摘できるものは、蓋の前後に突起のない組合式O・三型式、同O・四型式と称すべきものである。盆地での例は北葛城郡樺山古墳例（組合式O・三型式）〔小島一九五六〕など六例であり、他に大阪府柏原市東ワカ山古墳に一例（組合式O・三型式）〔梅原一九三四〕を見る。石材はいずれも二上山白色凝灰岩と推定され、分布の中心が奈良盆地西部も南半にあることより、これらを「葛城型組合式石棺」と呼ぶことにする。

この型式の形態的特徴は薄い板状の蓋の斜面に小さな突起が水平方向に近く付いており、上は蓋の平坦面を越えることなく、左右も石棺幅をほとんど出ないものが多いという点にある。これは屋根形の蓋にすべく、板状の石材の四周に斜面を作り、その削り残しをもって突起としたものが多いことによるのであり、著しい例は突起の上面が蓋の平坦面と同一の平面をなしている。換言すれば、石材の大きさに石棺の形態が規制され、委縮したものとなっているといえるべきものである。北葛城郡茶山古墳例（組合式O・四型式）〔島田一九五六〕はこの「型」の古い例にあたり、伴出した須恵器より六世紀前半と推定され、刳拔式石棺ではO・二型式に類し並行するものと考えられる。また、新しい例としてはTK二一七型式に近い須恵器を伴出した盆地東部の桜井市狐塚古墳（組合式O・四型式）〔網干一九五九〕があり、突起は垂直面にかかることも矩形化している。

奈良盆地の組合式石棺はほとんどが二上山白色凝灰岩製と推定され、現在その数は約五〇例にのぼる^③。その中には葛城型としたもの以外にも屋根形の蓋をなす例が数例はあるし、桜井市珠城山一号墳例〔小島・伊達一九五六〕のごとく板状

の石材をもってそのまま蓋石としているものもある。しかし、それらも多くは破片であり、そこからまとまった性格を導き出すことは困難といわなければならぬ。したがって、葛城型として一つの性格を与えた石棺群にもO・三型式、およびO・四型式のほかに、まだ何型式かのものを、とりわけ無突起型式などを含ませるべきかもしれない。奈良盆地東西の組合式石棺群の關係、あるいはこのような点に関しては、後に再び方法をかえて考察を加えたい。^②

〈三〉山畑型組合式石棺（第4図7・8）

「山畑型組合式石棺」はその名のとおりに大阪府東大阪市山畑古墳群〔藤井一九六六、東大阪市教委一九七三、東大阪府調査会一九七四〕を中心に、北は茨木市南塚古墳〔川端一九五五〕、南は八尾市高安古墳群〔白石一九六六、大阪府教委一九六六、一九六八〕に類例を見るもので、現在一一例を数える。初現の折よりほぼ完全な箱形を呈し、蓋は四周に幅七、八センチメートルの面取り風の斜面をもつだけで、基本的には突起をもたないものであり、やはり、石材が薄い板状のものであることからくる形態的特徴とみられる。

山畑古墳群といえ、他の群集墳に比べて組合式石棺の密度がきわめて高いことで知られているが、その数は推定をも含めると約二〇例に達する。この南に位置する高安古墳群も同様で少なくとも一〇例以上の存在が知られている。^③ いずれも組合式石棺であるが、そのうちの知見に入るもので、蓋の形態をいくぶんなりとも知りうる例は一二例であり、うち九例までが山畑型組合式石棺である。^④ したがって、大阪平野東部の石棺群は、いずれも組合式石棺で山畑型が主体をなしていると理解することができる。

現在のところ、この地域の組合式石棺で最も遡りうる例は、山畑古墳群では第三三号墳一号棺の示す六世紀後葉前半である〔東大阪市教委一九七三〕。しかし、場所は若干こととなるが、茨木市南塚古墳にその先駆的な例がみられ、伴出の馬具、須惠器などより一号棺は六世紀前葉、二号棺は六世紀中葉のものと推定する。

この地域の石棺石材は二上山白色凝灰岩が主体をなすが、一部に竜山石もみられる。南塚古墳の二例をはじめ山畑型の

ほとんどは前者よりなっているが、ただ一例、山畑四八号墳三号棺〔東大阪市調査会一九七四〕のみは後者の石材よりなっている。したがって、山畑型は二種の石材よりなるきわめて特殊な例となるが、竜山石を用いたものは類例にとぼしく、ほとんど実体が明らかでない^⑧。したがって、本稿では、いずれにしても二上山白色凝灰岩製のもの为主体を成す点は變りないことから、その特殊性の解明は将来に持ち越し、山畑型を二上山白色凝灰岩製として話を進めて行きたい。

大阪平野では以上のほかに、南部の大阪府南河内郡一須賀古墳群に一まとまりの二上山白色凝灰岩製の組合式石棺が分布している〔大阪府教委一九六九、同一九七〇、同一九七四〕。その数は二〇例を越えるが、破壊が著しく実体はあまり明らかでない。ただ、一須賀東山一号墳例（一須賀W—一号墳例、指数二九）〔大阪府教委一九六九〕は二上山白色凝灰岩製で刳拔式石棺と類似の組合〇・二型式であることが注目される。竜山石製に刳拔式石棺と同型式の組合式石棺が数多く存在するのであるから、二上山白色凝灰岩製にそれがあっても不思議はないのであり、組合一・二型式を示す同郡のお旅所北古墳例（指数約五〇）〔小林一九五三〕を含めて、一つの性格をもった組合式石棺群をこの地域に推定すべきであろう。

〔四〕石棺部材と結合技法（第3表）

畿内の組合式石棺にはいずれも底石がある。したがって、石棺の身は少なくとも五枚の部材から成っているわけであるが、その数は一定せず、蓋すら何枚かの部材よりなっている例が少なくない。まず、その点に目を向けたい。

京都盆地の播磨型は各部材がそれぞれ一枚よりなることが多く、蓋石と底石が二枚でも各長側石は一枚である場合がこれにつぐ。例外は一例のみであり、上記二つのあり方が基本である。

一方、奈良盆地と大阪平野の二上山白色凝灰岩製の組合式石棺では、各部材数にかなりのばらつきを見る。しかし、「型」の設定を行なった二つには若干の約束がみられるようである。すなわち、葛城型の場合は〇・三型式であれば蓋石は三枚、〇・四型式であれば蓋石は二枚の部材からなり、ともに左右長側石は一枚か二枚、底石は三枚か四枚の部材からなる。

第3表 組合式石棺部材の組み方と結合技法

分布地域	古墳名	側石組方	底石と側石	蓋と身	長辺と短辺	底石と		蓋石数	長側石数	底石数
						短辺	長辺			
奈良東部	星塚	Y	A	c	(d)	c	(d)	(3)		3
	東乗鞍 2		A			(b)	(b)	2		(2)
	珠城山 1号	Y	B	d	b・a	b	b・a	(4)	2・3	4
	珠城山 3号 2	Y	A	a	e	e	e			(3)
	馬塚		A			(b)	(b)			3
	三輪狐塚 1	Y	A	a	e	b	e	2	1・1	3
	三輪狐塚 2	Y	A	(a)	e	e	e			2
越塚	Y	A		(d)	d	b			(3)	
奈良西部	(西の山)	Y	A	a	(b)	(b)	(b)	2	2・2	4
	二塚		A			(b)	(b)			(2)
	平林		A			(b)	(b)			4
	茶山	Y	A	a	b	b	(b)	2	2・2	4
	櫛山	Y	A	a	b・a	b	b	3	2・2	4
	藤山	Y	A		(b)	(b)	(b)			(2)
	鳥土塚 1	Y	A	a	a	b	b		1・1	2
	鳥土塚 2	Y	A	a	(b)	(b)	(b)			3
	兄川底 1		A			(b)	(b)			3
	兄川底 2		A			(b)	(b・d)			11+
(安倍浄土寺)	Y	A	a			(b)	3		(3)	
大阪北部	南塚 1	X	B	a			b	2	1・2	2
	南塚 2	Y	A	a	b	b	(b)	(2)	1・1	2
耳原 1	Y	A	a	e	b・d	d	1	1・1	1	
大阪東部	山畑 8号	Y	A	d	e	d	d	4	2・2	4
	山畑 25号 2	Y	A			(b)	(b)			4
	山畑 26号				(d)					4
	山畑 33号 2	Y	A		d	d	d			5
	山畑 48号 2	X	A	(b)		(d)	(b)			(5)
	山畑 48号 3	Y	A	(d)		(b)	(b)			(2)
	愛宕塚 1			(d)						
(高安大窰)	Y	A	a・d	e	c	b	4	2・2	4	
大阪南部	平尾(群) 1	Y	A		e・b	(b)	b			1
	東わか山	Y	A	a	b・e	b	b	(3)	1・1	3
京都北部	丸山 1	Y	A	a	(d)	(b)	(d)	1		1
	福西 2号	Y	A	d	e・a	b	c	2	1・1	2
	福西(群) 2	Y	A	a	b	(b)	(b)	1	1・1	
	(光明寺) 1		A	a		(b)	(b)	1		1
	堀切 6号横穴	Y	A	a・d	d	b・a	d	2	1・1	2

山畑型では、南塚古墳例を除くと、蓋石と底石とが四枚よりなる例が多く、その場合左右長側石は各二枚となる。このあり方が崩れる場合は、山畑三三号墳二号棺〔東大阪市教委一九七三〕のごとく部材が増加する方向に向かう。

したがって、一般論として石棺部材の大きさを比較した場合は、刳抜式石棺―播磨型組合式石棺―葛城型組合式石棺―山畑型組合式石棺の順で小さくなる。つまり、葛城型や山畑型の蓋を中心とする石棺の形態には部材が薄い板状のものに限られるということが強い影響を与えているのである。同じ二上山白色凝灰岩製の石棺であっても、使用しうる石材の上に大小の差があることは石材採掘権など二上山開発のあり方を考える上で無視できないところである。

なお、対象とした組合式石棺は身の部材に突起をもたないのが普通であるが、部材の一部に突起をもち、それが特徴となる例も若干存在する。南塚古墳一号棺や耳原古墳一号棺のごとく長側石や底石に突起をもつ場合は、前代の長持形石棺的な要素のなごりとして理解されるが、奈良県天理市星塚古墳例〔小島一九五五〕や同桜井市珠城山三号墳二号棺〔伊達一九六〇a〕のように短側石の肩部両側に小さな方形の突起をもつものは、奈良盆地東部の地域的特色と解される^②。

さて、つぎには石棺部材の組み方と結合の方法をみてみよう。

石棺部材の組み方とは、特に身における底石と側石、長側石と短側石の関係をさす。前者では側石が底石の上にあるものをA式、側石が底石の外側にあるものをB式とする。後者では長側石の内側に短側石がくるものをX式、外側にくるものをY式とする。

対象とした組合式石棺では三例を除き、いずれもがA・Y式であり、前代に盛行した長持形石棺の基本的な組み方であるA・X式の伝統はまったく残っていない^③。この点、西九州、あるいは島根県東部の組合式家形石棺〔佐田一九七二、山本一九七〇〕と比較してみると、前者ではB・X式が特徴であり（底石のない例も多い）、後者でも横口のない側でみるとB・X式が主体である。また、畿内でも緑泥片岩や花崗岩、あるいは和泉砂岩を利用するこの前後の時期のシスト系の組合式石棺でもB・X式が多い。したがって、A・Y式の組み方は畿内の組合式家形石棺の一特徴であり、その出現時期も

畿内で組合式家形石棺の出現してくる六世紀前葉まで遡らせることができる。

では、つぎに組合式石棺の各部材をいかに結合して安定した容器とするか、その方法を「結合技法」と名付けて問題としたい。

古墳時代を通じて見られる石棺部材の結合技法は大別して、平面と平面を合せるだけの「平面技法」、段状に削った部材を組み合せる「有段技法」、部材の一方に溝を彫り他方をこれに挿入する「有溝技法（小穴入れ）」、および柄と柄穴とを用いる「柄穴技法」とすることができよう。そこで、この結合技法と各石棺群との関連をつぎに追ってみよう。^④

まず、奈良盆地の組合式石棺は分布を東西に分けているが、そこにおける結合技法の分布を観察すると、西部では知見の一六例中若干特殊な一例を除き、^⑤他はいずれも平面技法か有段技法を用いており、結合のいかなる場所にも有溝技法は見られない。一方、東部においてはいずれかの結合に有溝技法を用いる例が九例中六例あり、一個体の中において長側石と短側石、および側石と底石の二ヶ所の結合に有溝技法を使用する例が五例ある。したがって、この有溝技法の偏在性は盆地東西の石棺群を二つに分かちえる可能性の高さを示しているものと理解したい。

一方、山畑型組合式石棺を主体とする大阪平野東部では、一般的に有溝技法と有段技法の多寡をみただけではその特徴は明らかでないが、これを蓋と身の結合に限ってみると、そこに相対的な特徴を指摘することができる。一般に、組合式石棺の蓋と身の結合には単なる平面技法による「置蓋」の技法のものが多く、蓋の裏面に溝をもち「被蓋」とも言える有溝技法をとるものもある。後者の例は京都盆地の播磨型組合式石棺に二例、奈良盆地東部に一例と少ないが、大阪平野東部には七例（山畑型六例）を数える。^⑥また、被蓋という点では、蓋の裏面の外縁に突帯を付しその内側に身を入れる例も二例ある。すなわち、大阪平野東部の結合技法は部材の組み方との関連で被蓋をとる例が非常に多いという点に特色を見出すのであり、それは部材が小さいということが生み出した一技法ともうけとれる。

これらに対し、京都盆地の播磨型には際立った特色はなく、一般に有段技法が多く有溝技法が少ないという程度である。

このあり方は、特に側石と底石との結合についてのことであり、有溝技法が用いられるときは、おもに短側石と長側石との結合においてである。

〈五〉組合式石棺と「型」

畿内には刳拔式冢形石棺に勝る数の組合式冢形石棺が分布している。しかし、その分布を検討するとそれらもまた、けっして自在に分布しているのではなく奈良盆地東・西部、大阪平野南部石川右岸、同東部生駒山西麓、京都盆地北部と分布の中心を有している。しかも、以上の考察により明らかになったことは、各群にはそれぞれ特定の形態と石材をもつ石棺が中心的な位置を占めて存在していることであり、一見単純な石棺部材のあり方やその結合技法においても、いくつかの特徴を有しているということである。

再度それを確認するならば、竜山石製の播磨型組合式石棺は京都盆地北部に、二上山白色凝灰岩製の葛城型と山畑型の組合式石棺はそれぞれ奈良盆地西部と大阪平野東部に集中的に分布しているものであり、大阪平野南部の石川右岸には南大和型の刳拔式石棺と同一型式、同一石材の組合式石棺の存在が予測されるのである。また、奈良盆地の東西に分かれて分布する二群の組合式石棺も、形態的には葛城型組合式石棺が西部に集中すること、結合技法では有溝技法の分布に東西で差があること、および短側石の左右両肩に方形の小突起をもつ例が東部にのみ見られることなどよりこれを性格の異なる二群と考えるのが妥当と思われる。

ただ、注意しておきたい点は、葛城型としたものの型式が〇・三型式、〇・四型式のみではないかもしれないことである。それは盆地西部の二上山白色凝灰岩製組合式石棺をすべて葛城型として捉えうるかどうかという点にかかわってくることである。また、東部の桜井市にある狐塚古墳一号棺は葛城型であるにもかかわらず、東群にのみ顕著な有溝技法をとっていることから、東群の石棺型式にも葛城型と同じものが見られ、東西の差は結合技法と特殊な部材のみにあるのではないかといった疑問である。この二点については解決を将来にもち越さなければならぬが、いまは前述の見解が最も妥

当であろう。^⑧

なお、奈良盆地東部と大阪平野南部石川右岸の組合式石棺は前三者に比べて判明しているところが少ないゆえに「型」とはせず、それぞれ「東大和組合式石棺群」、「石川右岸組合式石棺群」とよぶことにしたい。

① 畿内の家形石棺は横穴式石室の主軸と並行に置かれるのが最も一般的である。したがって、前後・左右は羨門より奥に向かつてのそれである。

② 石棺蓋頂部の平坦面を指数化する方法は、すでに森浩一「奈良、大阪における横口式石棺の系譜」『壁面古墳高松塚』一九七二などに見られる。

③ 横口の有無は、それが「棺」であるか、「椁」であるかを論じるには重要な要素であるが、系譜関係を重視する本稿の分類では二次的要素となる。

④ 奈良県桜井市天王山古墳例は一・二型式の突起が蓋の斜面にあるにもかかわらず、平坦面指数は四六を示す。水平方向に出る突起が「面取技法」の展開の中で変形したと推定される形態を示すなど、少し特殊な例であるが、b₂類の範疇に入れる。また、御所市穴神塚古墳例は一・三型式の突起であるが、a類の変形と推定する。

⑤ 小野山節「日本発見の初期の馬具」『考古学雑誌』五二―一 一九六六では五世紀の中頃、小林謙一「甲冑製作技術の変遷と工人の系統」『考古学研究』二〇―四・二二―二 一九七四では五世紀の第三の四半世紀に編年されている。

⑥ 奈良市野上古墳と桜井市兜塚古墳のa₁類がそれにあたる。

⑦ 前者ではa₁類の野上古墳例と兜塚古墳例、a₂類の長持山古墳二号棺があり、後者では鴨稲荷山古墳例がある。しかし、滋賀県においては六世紀末、ないしは七世紀初頭以後の花崗岩製刳抜式石棺に印籠蓋の

ものがあり(丸山一九七一)、注目される。

⑧ 大阪府羽曳野市徳楽山古墳例などで、ほとんど完全な箱形をなす。押熊石棺もこれに近い。

⑨ 京都府綴喜郡八幡茶臼山古墳例や長持山一号棺などは「松香石」とことなり九州の阿蘇熔岩である可能性があること。あるいは、京都盆地の家形石棺には「松香石」が使用されていないことなどは知られていた。小林行雄氏教示。

⑩ 岩石を構成する鉱物の割合をX線回折によって回折像として取り出し、その回折像を比較する方法(逸見一九七四)。

⑪ 間壁氏らによる石材の同定結果が報告されている畿内の家形石棺には以下のものがある。阿蘇熔結凝灰岩―長持山古墳一号棺・唐櫃山古墳例、二上山ピンク凝灰岩―東乗鞍古墳一号棺・兜塚古墳例・長持山古墳二号棺、二上山白色系凝灰岩―東乗鞍古墳二号棺・南塚古墳一・二号棺・水泥古墳一号棺・権現堂古墳例・宮塚古墳例・都塚古墳例・天王山古墳例・竜山石―艸墓古墳例・耳原一・二号棺・平尾一号棺(京都大学保管)・水泥古墳二号棺・新宮山古墳二号棺・松本塚古墳の一例

⑫ 大阪府柏原市の高井田横穴群(梅原一九三四)や、安福寺横穴群(水野正好・久貝健・福西正幸「玉手山安福寺横穴群調査概要」『大阪府文化財調査概要』一九七二―五)一九七三)などに類例をみる。

⑬ 大阪府八尾市愛宕塚古墳の一例などである。なお、二上山西方ではごく僅かではあるが、寺山の石英安山岩を用いている。注14参照。

⑭ 大阪府羽曳野市飛鳥千塚古墳群中には、刳抜無突起型式^{a2}類に属す鏡塚古墳例と鉢代南峰古墳例があり、寺山の石英安山岩を利用して「梅原一九三五、水野正好・野上丈助『近飛鳥遺跡分布調査概要』」（大阪府文化財調査概要）一九七二（一六）一九七二。しかし、オーコ支群も含めて、石室、ないしは石櫛の構造、類例の少なさなどより、きわめて特殊な場合が想定されるために、本稿では注で触れるにとどめた。以下の論の展開には差障りはなく、将来的にはこれを補強するものと考えている。

⑮ 岡山県では総社市長砂古墳の一例が知られている（間壁一九七四 a）。

⑯ 兵庫県加古川流域では神崎郡大門石棺（神戸新聞社会部編『祖先のあしあと』四一九六一）があり、加西市倉谷石棺（栗山一九三四一五）も萬浦池古墳の類品である。

⑰ 武藤誠「石室殿」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』九一九三二にみえる石室殿横の小石棺などがそれである。なお、神戸市東部周辺には小型の刳抜式家形石棺が数例報告されているが（神戸古代史研究会一九七五）、今回は確認しえたものだけを图示した。

⑱ 本稿でいう「地域」とは、家形石棺の分布状態を基本とした、明確ではないが、一つの単位地域的なもので、たとえば奈良盆地南部、京都盆地北部などというのがそれにあたる。畿内はいくつもの「地域」を含んだ「地方」として取り扱う。第2表では大阪平野南部を二分しているが、羽曳は主として藤井寺市、柏原市をさし、南半はより以南の石川流域、羽曳野丘陵一帯をさす。

⑲ 二上山ピンク凝灰岩製のもの、この外に岡山県邑久郡築山古墳例（刳抜O・二型式^{a1}類）〔梅原末治「岡山県下の古墳調査記録二」『瀬戸内海研究』9・10 一九五七、間壁一九七四a〕、滋賀県野洲郡円山古墳例（刳抜O・二型式^{a2}類、指数二四）〔滋賀県調査会一九三六〕

があり、いずれも畿内のものと同一型式で、後述の三輪型に属するものである。滋賀県野洲郡甲山古墳例〔滋賀県調査会一九三六〕は現在みられないが、写真でみるかぎりには、同じ三輪型のように、この「型」では唯一の刳抜O・二型式^{a1}類のようである。

⑳ この見解が成立すれば、現在見ることでできないものでも、その型式より「型」を推定することができる。第2表で石材名がないのに「型」の名があるのはそのためである。

㉑ したがって、刳抜式石棺と同様に平坦面指数を編年に用いることができると考える。なお、例は多くないが、刳抜一・O型式^b類のごとく、古い型式が定型化して新しい時期までのこるは播磨型の特徴である。京都市丸山古墳一号棺もその一例である。

㉒ 現在、京都市後宇多天皇陵前に置かれている石棺は奈良県出土と伝えられており〔安藤一九七五〕、少なくとも二棺以上の部材からなっている。

㉓ 丸山古墳には三例の組合式家形石棺があり、突起部の残る三号棺は、やはり竜山石製で、一・二号棺よりかなり新しい型式を示す。

㉔ 生駒郡島土塚古墳一号棺は一・二型式と復原されているが〔伊達一九七二〕、報告書に載るだけの破片からでは明確なことはいえない。なお、無突起型式のみは共通であろう。

㉕ 注22の伝奈良県出土とされる後宇多天皇陵前の一例を除けば、確実な播磨型組合式石棺はみつからない。

㉖ 天理市竜王山古墳群に三〇例近い組合式石棺の存在が予想されている〔清水一九七一―二〕、そのことが盆地の組合式石棺数を倍増している。なお、清水氏は石材を榛原石としているが、若干疑問がある。樋口清之氏がこの古墳群中の一石棺を「松香石」製としており〔樋口一九二八〕、筆者も横六中にその破片を発見しているため、二上山白色凝灰岩製として扱う。

- ②7 なお、奈良県宇陀郡榛原町には、室生火山系の流紋岩質熔結凝灰岩「松下一九七一」である榛原石を利用した組合式石棺が発見されている。しかも、不動堂二号墳一号棺〔伊達宗泰「宇陀郡榛原町棺不動堂古墳」『奈良県文化財調査報告』(埋蔵文化財編)三 一九六〇〕、奥の芝二号墳例〔泉森駿・河上邦彦「宇陀福地の古墳」(『奈良県文化財調査報告』一七)一九七二〕では、当時の石棺には数少ない柄穴技法(後述)がみられる。各部材が薄い板石よりなる、型式化の進んでいないものであるが、同一石材よりなる、いわゆる「磚梯式石室」とともに注目される。ほとんどが七世紀代のものである。
- ②8 「白石一九六六」では一古墳に石棺の存在することが指摘されており、「大阪府教委一九六六」では八例の出土が伝えられているが、両者の関係は不詳である。
- ②9 他の三例は高安愛宕塚古墳の一例〔大阪府教委一九六八〕のごとく、扁平な家形の蓋に矩形の突起が付くもの、あるいは厚みのある蓋の一角片(内面に溝を有す)、板状の石材に小さな突起が付くものである。以上のもは主として東大阪府郷土博物館、同市遺跡保護調査会で発見の機会を得たものである。
- ③0 高安古墳群では愛宕塚古墳に六世紀前葉の馬具、須恵器などが出土しているが、同古墳出土の注29の例は型的に後出のものである。
- ③1 山畑古墳群のすぐ北に所在する松木塚古墳例(藤井直正氏指示)は播磨型組合式石棺そのものである可能性が高く、竜山石製のものとはいっても、破片や部材のみで「型」を断定することは困難である。なお、山畑型に竜山石がみられることは、山畑型の用いる二上山白色凝灰岩が同じ石材をもちいる各「型」の中では最も小さいことと関連しているようである。
- ③2 天理市東乗鞍古墳二号棺について「蓋石は二枚にして、傍に取り除きあり、棺の内部は空虚にして、一方の外部に方形の小さき突出せる

もの二個ありて云々」〔佐藤一九一六a〕と伝えるものも、この例にあたると思う。

- ③3 A・Y式が家形石棺の特徴であることは、小林行雄氏によりすでに指摘されている〔『古代の技術』一九六四〕。最近では田中久雄氏が九州の家形石棺をも考慮して述べている〔『長持形石棺の再検討』『古代学研究』七七 一九七五〕。また、小林氏は前著においてつぎの結合技法にも触れている。

- ③4 第3表ではさらにa—eと細分している。

- a 平面どうしがただ単に接するだけのもの。
- b 結合する一方にのみ段状の加工があるもの。
- c 結合する両方に段状の加工があるもの。
- d 一方に溝状の彫り込みがあり、これに特別な加工のないものを挿入するもの。
- e 一方に溝状の彫り込みがあり、これに挿入するものには段状の加工があるもの。

aが平面技法、b・cが有段技法、d・eが有溝技法である。なお、柄穴技法は畿内の家形石棺には見つからない。



- ③5 北葛城郡兄川底古墳では二例の底石が発見されているが、二号棺の底石は少なくとも一以上の部材から成っており、その一部に有溝技法がみられる。

- ③6 山畑型六例中三例は明確な溝を彫らずに、断面「逆への字」状に浅く彫りさげるだけをもってこれに代えている。山畑型に顕著な技法である。

- ③7 山畑型のみは石材の一部に異なる種類のものを用いていることが注

目される。

② 狐塚古墳一号棺が比較的新しい時期のものであることも考慮されな

ければならない。

四 「型」の展開とその意義

《Ⅰ》三つの画期（第4表・第5図）

以上で畿内の家形石棺の分析を終えたわけであるが、その過程で三輪型（剝拔式石棺）、南大和型（剝拔式石棺）、葛城型（組合式石棺）、山畑型（組合式石棺）、播磨型（剝拔式・組合式石棺）の五つの「型」と、九州剝拔式石棺群、東大和組合式石棺群、および石川右岸組合式石棺群の三群の存在が明らかになったことと思う。「石棺群」としたものは将来的には「型」として捉えるべきものであるが、前者は畿内に類例が少ないため、また後二者は、今の段階では石棺の型式が十分明らかでないため、一般的な群としての性格づけにとどめておきたい。

繰り返しというならば、ここでいう「型」とは素材（石材）と製品の形態（型式）と需要のあり方（分布）の三者が有機的に結びついた一つの性格をもった石棺群をさすのであり、それはとりもなおさず、特定の石工集団によって特定の地域で製作され、特定の人々によって採用されたことを示すものと考ええる。そして、後述のごとく、家形石棺を採用する主体はあくまでも畿内の有力豪族層であり、しかも古墳時代後期のほとんどの大型古墳に家形石棺が採用されていることからすれば、この「型」や「石棺群」の動向はそれぞれ特定の有力豪族層の動向ときわめて密接に結びついていたものと推察されるのである。

分布の中心＝需要の中心＝製作地とするのはあくまで認識の上での場の概念であり、実際は、たとえば二上山石材のものであれば大阪府南河内郡の鹿谷寺跡や奈良県北葛城郡の屯鶴峯などに想定されている石切丁場において、ほとんど完成品に近いものが製作され、所定の地へと運ばれたものであろう。したがって、この場の概念にしたがうかぎり、たとえ分

第4表 地域別家形石棺変遷表

時期	5世紀		6世紀		7世紀	
	後	前	中	後	前	中・後
平坦面指数	10	20	30	40	50	60 (特殊)
奈良	東部	[斜線]		[三輪型]	[南大和型]	[播磨型]
	南部	[三輪型]	[南大和型]	[南大和型]	[南大和型]	[南大和型]
	西部	[三輪型]	[南大和型]	[南大和型]	[南大和型]	[南大和型]
大阪	北部	[三輪型]	[南大和型]	[南大和型]	[南大和型]	[南大和型]
	東部	[三輪型]	[南大和型]	[南大和型]	[南大和型]	[南大和型]
	南部	[三輪型]	[南大和型]	[南大和型]	[南大和型]	[南大和型]
京都	北部	[三輪型]	[南大和型]	[南大和型]	[南大和型]	[南大和型]

九州: [斜線] 三輪型 [■] 南大和型 [□] 播磨型 [○] 他の組合式石棺 () 推定

布の中心地を遠く離れた所へ石材が持ち運ばれ、その地で石棺が製作されたとしても、その石棺が前記の「型」のいずれかに属するものであれば、それは中心部において製作され遠くへ持ち運ばれたと解しても本質的な差はないのである。ただ、この場の概念に石工集団を支配した豪族層の所在地といった性格を加えるならば、播磨型のみは後述のような理由から加古川流域に畿内の「出先機関」的な性格のものを想定しなければならぬ。

第4表は以上によって得た各「型」と「石棺群」の畿内各地域における変遷を図表化したものである。

① まず、五世紀後半の段階に奈良盆地東部で二上山の石材を用いて三輪型の製作が開始される。

② 続いて六世紀前半に入ると、奈良盆地の南部では三輪型の影響を受けた南大和型が、同盆地の西部では葛城型が、大阪平野東部では山畑型が、兵庫県南部では播磨型が製作を開始し、石川右岸組合式石棺群、東大和組合式石棺群がこれに続く。しかし他方では、三輪型がほとんど姿を消してしまふ。

③ そして、この状態はしばらく続くが、六世紀末から七世紀初頭に至り、南大和型と播磨型の型式差が明確になるとともに、前者は大阪平野南部にも分布を拡大し、後者は製作量を急増しつつ奈良盆地南

部や京都盆地北部を中心に畿内の各地に分布するようになる。一方、他の二上山白色凝灰岩製の組合式石棺は分布を拡大することもなく、ほぼ七世紀前葉をもって終る。

つまり、「型」の盛衰という観点からみれば、畿内の家形石棺の全体的な動向は、発生をも含めて、以上の三つの画期を経て展開したといえるのである。

《二》画期の意味

では、このような家形石棺の動向はどのように理解されるのであろうか。まず、家形石棺の発生よりみてゆこう。

〈一〉家形石棺の発生

畿内における家形石棺の発生を考えるにあたっては、大阪府藤井寺市長持山古墳の二つの石棺がきわめて重要な示唆を与えてくれる。すなわち、この古墳には九州刳抜式石棺群に属す刳抜一・〇型式 a_2 類と三輪型の刳抜〇・二型式 a_2 類が共存し、屋根形の蓋をもつことからともに家形石棺の範疇に入れられている。しかし、この二者のみでは一号棺の一・〇型式の突起から二号棺の〇・二型式の突起への展開を理解することはできないのである。そこで、二号棺の製作地と推定する奈良盆地東部に目を向けてみると、そこにはいまだ蓋の頂部に平坦面をもたない段階の刳抜〇・二型式 a_1 類が分布しているのである。したがって、この三者の関係を合理的に解釈するならば、すでに奈良盆地東部で製作が開始されていた三輪型の刳抜〇・二型式 a_1 類が、九州刳抜式石棺群の刳抜一・〇型式 a_2 類（九州では屋根形棺蓋舟形石棺の範疇に入る）の影響を受けて、蓋頂部に平坦面をもつ a_2 類へと変化したとするのが最も妥当と考えられるのである。そして、蓋の頂部に平坦面をもつようになったことが蓋の各稜線を直線化し、竪穴式石室に変わって横穴式石室内に置かれるようになったことが、床面の構造変化などと対応して身の箱形化を押し進めたと推定するのである。

すなわち、三輪型は、第二章で述べた全国各地の一般的な場合と同様、最初は舟形石棺として製作が開始されたのであ

り、畿内で「家形石棺」と呼ぶものは単にその形態変化にすぎないのである。したがって、本質的には舟形石棺と同じ単なる「棺」なのであり、それが後にまったく別個に起こってきた横穴式石室と結びついて多用されるようになったのである。畿内の家形石棺の発生をこのように考えれば、シストに祖型をもち「棺」としてよりも「室」としての用途をより強く果したと推定される九州の家形石棺〔佐田一九七二〕との質的な差異もおのずから明らかになってくるのであり、両者とともに九州の屋根型棺蓋舟形石棺の影響下に発生したとしても、その母体となったものと、その用途において根本的に異なっていたのである。畿内の家形石棺は、まったく新しい理念のもとに生み出されたものではけっしてなく、三輪型の〇・二型式の突起をもつ蓋の形態にしても、京都府城陽市久津川車塚古墳例〔梅原一九二〇〕のごとく、すでに長持形石棺に見られるところであり、舟形石棺でも福井市宝石山古墳例〔斎藤一九六〇〕や島根県八束郡玉造築山古墳例〔山本一九六六〕などをあげることができるのである。しかし、以上の点は当時の畿内の一角に刳抜式石棺が出現してくることに意義を弱めるものではない。

このようにして畿内では、衰退しだしたとはいえ、他方で、いまだ長持形石棺が製作されている段階において、奈良盆地東部で二上山の石材を利用した三輪型の製作が始まり、そして家形石棺としての体裁を整えていったが、三輪型はその後長くは続かず、これにつぐ型式の刳抜式石棺は石材も分布地域も異なる南大和型として登場してくるのである。そして、奈良盆地東部には、以後東大和組合式石棺群が分布するようになる。この点の解釈に関しては、三輪型を採用した勢力が衰退し、まったく新たに組合式石棺を採用する勢力が台頭してくるのか、あるいは二上山石材の採掘の仕方に大きな変化が起り、三輪型を製作していた勢力も組合式石棺を作りうる程度の二上山白色凝灰岩しか入手できなくなったためか、明らかでない。前述のごとく、六世紀前葉以後の二上山白色凝灰岩の入手に関してははっきりと量的な差異が認められることや、天理市東乗鞍古墳のごとく同一横穴式石室内に三輪型と組合式石棺の両者が共存していることなどからみれば、後者の場合の可能性も十分考えられるものである。

〈二〉「型」の分立

一方、三輪型がこうのように変移して行く前後に、畿内の各地域では二上山白色凝灰岩や竜山石を利用した家形石棺の製作が開始されだす。しかもそれは、もはや畿内の一地域の現象としてではなく奈良盆地の東・西・南部、大阪平野の東・南部、および兵庫県南部と畿内のほぼ全域にわたるのである。したがって、五世紀前半代を中心とする畿内の大型前方後円墳の石棺が、一元的に供給されたと推定される、竜山石製の長持形石棺をもってほぼ齊一化されていた現象と比べれば、この現象はきわめて対照的であるといわなければならない。

五世紀後半から六世紀前半にかけての時期は、長持形石棺が衰退し、それを採用していた五世紀型の大型前方後円墳、および大型古墳群が衰退して行く一方、横穴式石室が畿内でも徐々に普及し、群集墳の築造が日増しに盛んになっていく時期である。したがって、これらの政治的、社会的動向と三輪型に始まる家形石棺の展開とは、けっして無関係ではありえず、この間に大型前方後円墳や長持形石棺などをもって代表された五世紀型の政治秩序が、大きな変質をとげたと予想されるのである。しかも、その先駆けとなった地域が、長持形石棺の盛期における中心的古墳群である、古市古墳群や百舌鳥古墳群の所在する大阪平野南部周辺ではなく、それに先立つ時期の大型前方後円墳が集中した奈良盆地東部であることは、大いに注目し値する。

その間の質的な変化についての検討は後日を期したいが、この六世紀段階における各「型」の関係を、長持形石棺との対比をも含めて列挙すればつぎのごとくである。すなわち、①石棺利用者の範囲が広まったこと、②畿内の各地域と加古川流域で製作されたこと、③同じ家形石棺とはいっても二上山白色凝灰岩を用いる各「型」ごとには刳技法、組合式を越えた型式差が認められるが、唯一南大和型と竜山石製の播磨型との間には型式差が少なく、両者がきわめて密接な関係にあったこと、④いずれの「型」もほとんど分布を拡大することなく、一地域内にとどまっていること、⑤しかし、二上山石材の利用に関しては明確に量的な差があり南大和型―葛城型―山畑型の順で量的に劣って行き、この石材における規制

が石棺の型式に強い影響を与えたこと、⑥この点は単に一山中の石材採掘権をだれがにぎるかという問題だけではなく、切り出された石材、ないしは石棺の搬出ルート、すなわち当時の大和と河内を結ぶ主要な街道である竹内越や穴虫越の通交権などの問題ともからみきわめて重要であることなどである。

したがって、この段階ではじめて、畿内各地域の有力豪族はそれぞれ石工集団を組織して独自の型式をとる家形石棺の製作を開始し、石棺の型式というかたちで氏族の個性を表現するようになったが、彼らの間にある、一つの政治的な秩序づけが石材の量的な差としてあらわれたと推定することができるのである^④。そして、二上山石材の利用で最も優位にあつたのは南大和型であり、この「型」と同一型式の播磨型は、遠く竜山に石材産地を求めていたのである。

そこで、以上のことを考慮しつつ家形石棺を収める古墳と、当時の、特に奈良盆地における古墳のあり方に目を向けてみよう^⑤。

まず、家形石棺を収める古墳についてみると、①刳拔式石棺（主として南大和型）をもつ古墳は独立の大型古墳である場合がほとんどで、群集墳中にあるとはいっても奈良県北葛城郡笛吹神社古墳のごとく〔泉森一九七一〕、群中の中心的大型円墳であり、一般の群小古墳には採用されていない。②その点、組合式石棺はいずれの「型」や「石棺群」においても、群集墳に多用されている例があり、刳拔式石棺との間に階層差のあることを思わしめるが、たとえば奈良県北葛城郡の二塚古墳〔上田一九六二〕、平林古墳〔小島一九六〇〕、あるいは奈良県生駒郡烏土塚古墳〔伊達一九七二〕のごとく、後期としては大型の前方後円墳にも採用されている。③そして、刳拔式石棺を採用している大型古墳と組合式石棺を採用している大型古墳とを比較してみると、後者は前者に對してまったく遜色ないばかりでなく、前者の多くが大型円墳であることからすれば、前者を上回っているとさえいえるのである。④畿内の古墳時代後期の主要古墳は、ほとんどが家形石棺を採用していたと考えられるのであるが、③の点は家形石棺の出土が知られていない後期大型古墳をも考慮に入れて、盆地東・西・南部の古墳群を比較しても同様である。

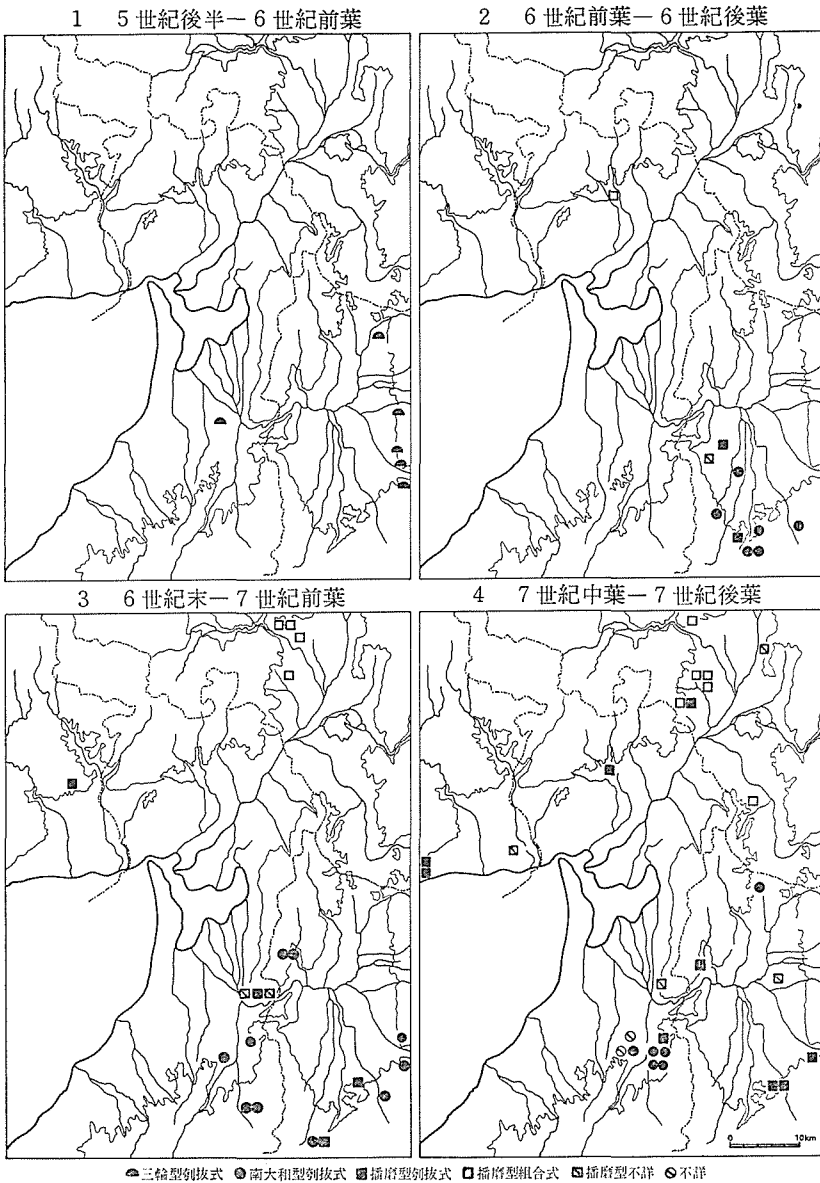
したがって、ここでいえることは、各地域において独自の型式をもつ石棺が見られる背後には、古墳の規模からみるかぎり、ほぼ同じ程度の政治勢力をもつ豪族の存在が推定され、それぞれ権勢を競っていたと考えられることである。また、その中で南大和型が石材の入手で最も優位を占めたのは奈良盆地南部の地に宣化・欽明両天皇陵の伝承をもつ前方後円墳があり、奈良県下最大の前方後円墳である見瀬丸山古墳が存在することなどと関連し、この地の政治勢力が大和政権の中にきわめて重要な位置を占めていたと推定されることである。

すなわち、古墳のあり方からみても、先に家形石棺の各「型」の関連から推測した、この段階においては、個性を表わし出した豪族層が畿内の各地域に分立しているが、その間に南大和型を中心とした一つの政治的な秩序づけがあったとする見解はある程度承認されるものと思われるのである。

また、以上のような家形石棺の利用のされ方から見れば、葛城型、山畑型、および東大和組合式石棺群は、それぞれの分布する地域において、あまり階層的な使い分けは見られないといえる。これに対し播磨型は、その主体の出現してくる六世紀末以後を考えると、組合式石棺は京都盆地に集中し、しかも、京都市福西古墳群〔梅原一九一四、藤沢一九六一など〕などの群集墳にも採用されているのに対し、当時政治の中心であった奈良盆地南部などでは、判明するものはいずれも刳拔式石棺で、しかも、独立墳に採用されているといった差が見られ、そこに階層的な使い分けを推定することができるのである。

そこで、この播磨型にみられる刳拔式石棺と組合式石棺との関係を、同一石材より成り、しかも同一型式の蓋をもつ南大和型と石川右岸組合式石棺群に適用してみると、両者は本来一つのセットとしてあったもので、その階層的な使い分けの結果が分布を奈良盆地と大阪平野に分かつことになったと理解することができるのである。六世紀末以後の段階において、南大和型が大阪平野南部の石川流域に分布を拡大する理由の一つもそこにあったのであろう。

以上のごとく、この段階における「型」、および「石棺群」の間に、また刳拔式石棺と組合式石棺との間にはいくつかの



第5図 三輪型・南大和型・播磨型石棺時期別分布図

注目すべき関係を指摘することができるのであるが、基本的には各「型」、ないしは「石棺群」がいずれも各地で製作され、しかもその地の一地域的なものとして存在していたということであろう。そして、このかたが崩れてくるのは六世紀末から七世紀前葉にかけての第三の画期においてのことである。

〈三〉石棺の斉一化

この時期になると南大和型が大阪平野南部や奈良盆地の平群谷に進出し、この「型」としては最大規模に分布を拡大するとともに、播磨型が急増し、畿内各地にその数を増してくる。そして、このような動きとは逆に二上山白色凝灰岩製の組合式石棺はほぼ七世紀前葉をもって姿を消して行く。

このような動向は第5図のごとく個体数の上ではけっして顕著であるとはいえないが、それは一つには、七世紀代になると主要な古墳が限定され、しかも主として奈良盆地南部や大阪平野南部に集中し、奈良盆地の東・西部や大阪平野の東・北部には僅かなものが点在するのみとなるような古墳一般の動向を背景としているからである。しかし、このような点を考慮するならば、かえって南大和型や播磨型が当時の家形石棺の中に占めた比重はさらに大きいものになるといえるであろう。

奈良県生駒郡の平群谷は五世紀末、ないしは六世紀初頭以後の大型古墳が連綿と築造されたことで著名な地域であるが、ここにおける石棺のあり方は柿塚古墳（花崗岩質石材よりなるシスト系石棺）―三里古墳（組合式家形石棺）―烏土塚古墳（組合式家形石棺）―ツボリ山古墳（南大和型）―西宮古墳（播磨型剝抜式石棺）と続いており、^⑦この間の状況をきわめて端的に反映しているものと理解される。

すなわち、この段階において畿内の主要な古墳の採用した家形石棺は南大和型、ないし播磨型へと斉一化の傾向を強くみせるのである。

そして、この点に関しては、つぎに二つの重要な現象を指摘することができる。

まず、その第一は、今日九州的な家形石棺や山陰（出雲）的な家形石棺に対して、畿内的なものと呼ばれている家形石棺群に關してである。それらのうちの一方は、それぞれ在地の石材を用いて製作されたと推定する家形石棺群であり、広島県東部、岡山県南部、鳥取県東部、滋賀県南部、岐阜・愛知県木曾川流域、静岡県東部、および北関東などの地域に分布している。そこで、これら各地域の家形石棺を検討してみると、石棺の製作地域は、軟質の凝灰岩質石材の入手しうるところでは、六世紀後葉頃より急激に広がり、六世紀末、ないしは七世紀初頭には硬質の花崗岩をもちいる広島県東部や滋賀県にも及んでいる。しかも、ほとんどいづれの地域でも南大和型、ないしは播磨型を模倣するかたちで製作が開始されたと推定されるのである。それに対して残る一方は、七世紀代を中心に持ち運ばれた播磨型そのものであり、その分布は西は山口県防府市大日古墳例〔梅原一九三六〕より東は滋賀県志賀郡エンド古墳例〔滋賀県調査会一九三六〕にまで及んでいるのである。したがって、南大和型と播磨型、あるいはこの両者に共通する石棺型式は畿内の石棺型式を齊一化するばかりではなく、西は東九州から東は関東までのそれに強い影響力を示したといえることができるのであり、播磨型にいたっては直接配布されたと考えられるのである。^⑧

第二は、播磨型と奈良県橿原市岩屋山古墳〔梅原一九三五a〕を代表例とする「岩屋山式横穴式石室」との関連である。白石太一郎氏によれば、一定のプランのもとに製作されたと推定される、「岩屋山式横穴式石室」と、その「亜式」は奈良盆地と大阪平野南部に八例を数えるが、その被葬者は七世紀前葉の大和政権において、大夫として朝政に参画していた執政官の豪族層である可能性が高く、そこに公葬的性格が窺えるという〔白石一九七三〕。

そこで、この「岩屋山式」、ないしはその「亜式」の横穴式石室に採用された家形石棺を検討してみると、判明するものは奈良県橿原市小谷古墳例、同桜井市艸墓古墳例、および同生駒郡西宮古墳例とその類例は僅か三例のみであるが、いづれも播磨型剝技法式石棺なのである。したがって、両者はきわめて密接な関係にあったものと推定され、それによって播磨型の比重はさらに増大するのであるが、両者にみられる石材処理技術のあり方もこの見解の妥当性を示しているものと考えられる。

すでに、坪井清足氏が指摘したごとく〔坪井一九六一〕、七世紀代における花崗岩をも処理しうる技術は仏教文化の伝来にもなう寺院建築技術の一環として渡来したものと推定できるものであるが、花崗岩を丹念に加工している「岩屋山式石室」の築造はその技術でもってはじめた可能となったのであり、この時期における播磨型の隆盛もこの新しい技術の導入をその背景としていたと推定されるからである。「岩屋山並式」に属す西宮古墳の横穴式石室と播磨型の家形石棺が同一の石材処理技法（敲打技法）により処理されていることや、同じく播磨型の奈良県御所市水尾古墳二号棺（蓮華文浮彫り）〔天沼一九一三b、網千一九六一〕や奈良県橿原市葛浦池古墳の二例（「ソリ」をもつ寺院風の蓋）が仏教的要素を強くもつことなども、このように理解してはじめて解決がつくものと思う。

つまり、「岩屋山式横穴式石室」を製作した石工集団と六世紀末以後の播磨型を製作した石工集団は同一系譜の石材処理技術を駆使し、しかもその製作物のあり方が密接に結びついていることからみて、奈良盆地と加古川流域と作業の場こそ進えていたとはいえ、同一組織内に組みこまれていた石工集団である可能性がきわめて高いのである。

したがって、以上の点より結論づけていえば、三輪型に採用され、主として南大和型を介して持ち伝えられ、展開してきた家形石棺の型式が、この時期になってはじめて全国的に通用する「公的な石棺型式」としての性格を獲得するようになり、それによって、はじめて石棺型式の全国的な規模での齊一化現象が生まれたものと推定するのである。^⑨

以上のごとく、六世紀末以後の南大和型、および播磨型の性格を推定するとき、その動向は新井喜久夫氏が推古朝にその起源を求めた陵墓制や〔新井一九六六〕、水野正好氏が、群集墳の衰退と関連して提唱した推古朝の葬送規制〔水野一九七〇〕などと対応し、同時期における葬送儀礼の一側面を明確に反映しているものといえるであろう。そして、その動向は、前段階においてみられた豪族層の分立や、その間における種々の政治的秩序といったものが、南大和型と播磨型両勢力のもとに止揚・統合されていった動向と理解され、大化改新を経て律令体制へと上り詰める七世紀前半代の政治的状况を反映しているものと受けとることができるのである。

それでは、南大和型と播磨型の関係はどのように捉えうるのであろうか。その点では、七世紀の前葉に分布を最大に広げた南大和型が、七世紀中葉以後になるとほとんどが大阪平野南部の磯長谷と羽曳野丘陵の一部に収束し、それまで一貫して分布していた奈良盆地南部には確例がなくなり、同地には播磨型のみが分布するという現象が注目される。そして、この現象は南大和型が奈良盆地南部から姿を消さざるをえなくなった政治的変動を暗示しているものと思われるのである。南大和型にみられるこのような現象はその分布地域とあいまって、それを採用した氏族が蘇我氏、およびそれと密接な関係にある氏族ではなかったかという推測に導くものであろう。六世紀前葉、奈良盆地南部に登場し、徐々に発展しつつ七世紀前葉に至るその動向は欽明朝に大臣として活躍した蘇我稲目以後の蘇我氏の発展と二重写しにしようものでもある。したがって、今は、南大和型は蘇我氏の「私的棺」であった可能性が最も強く、これに対して、播磨型は大和政権の「公的棺」であった可能性が強いものと推測しておきたい。^①

① 石切丁場については、すでに大正一四年に、関野貞氏が鹿谷寺跡と岩屋を想定したが、その後、屯鶴峯や牡丹洞などもそれと指摘されている〔川勝一九五七、北野耕平「日本における壇上積墓壇の成立と初期の新羅系要素」『新羅と飛鳥・白鳳の仏教文化』一九七五〕。なお、完成品近くまで加工して運ぶ方が、原材をそのまま運ぶよりも、約三分の二の重量ですむ。滋賀県鴨瀬古古墳の石室石材の間にみられた二上山白色凝灰岩〔浜田一九二三〕は、現地における仕上げの際のものと考えられる。

② 畿内の家形石棺が九州列状式石棺群の影響を受けたという見解は、すでに間壁忠彦氏らによって提出されている〔間壁一九七四b、一九七五a〕。しかし、氏らは九州の工人が畿内へ来て、二上山ピンク凝灰岩を用いて、家形石棺を製作し始めたと推定しており、著者の考えと若干異なる。

③ 少なくとも、奈良市法華寺の石棺や大阪府高槻市前塚古墳例〔梅原

末治『久津川古墳研究』一九二〇〕などの型式のものは、三輪型と並存していた可能性が高い。

④ このような状態をどのように理解するかは氏姓制度の問題と密接にかかわってくる。間壁氏は長持形石棺を「畿内的な秩序に合する身分的なものの表現」ととらえ、「長持形石棺の見られる時期こそ、氏姓制が明確化された時」としている〔間壁一九七五c〕。

⑤ 森浩「後期前方後円墳の分布と規模」『ヒストリア』三九・四〇一九六五、網干善教「大和における後期古墳の歴史的背景」『日本古文化論攷』一九七〇などを参考とした。

⑥ 播磨型は京都市福西古墳群、東大和組合式石棺群は天理市竜王山古墳群、山畑型は東大阪市山畑・高安古墳群、石川右岸組合式石棺群は南河内郡一須賀古墳群などにおいて多用されている。また、葛城型は北葛城郡山口千塚古墳群において多用されている可能性がある。いずれの「型」や「石棺群」においても、このような例が主として一例あ

ることは興味深い。

- ⑦ 各古墳の文献は柿塚古墳〔辰巳和弘「平群氏に関する基礎的考察」『古代学研究』六四―六五、一九七二〕、三里古墳〔河上一九七五〕、ツボリ山古墳〔久野一九七二〕、西宮古墳〔梅原一九三五〕である。なお、辰巳和弘氏の論考は平群谷のすぐれた地域研究である。

⑧ 畿内以外の各地域の家形石棺については、ここで詳細に触れる紙数はないが、軟質石材を用いるか、硬質石材を用いるかは単なる時間的な差のみではない。それは硬質石材を用いる段階では、滋賀県や広島県の周辺に、すでに播磨型が持ち運ばれていたことからだけでも予想することができる。第三の画期を経て地方への影響の仕方が質的に異なつたと推定する。

⑨ 主として一・二型式と無突起型式a類の蓋をもつ石棺型式がこれにあたる。刳抜無突起型式b類は特殊な蓋をもつ石棺型式であるが、それらは畿内のごく一部の南大和型と播磨型にのみ限られ、しかも、七世紀中葉以後のものである。この現象は、後述の南大和型にみる分布の上での大きな変化とともに、七世紀中葉が第三の画期に続く変革の

時期であつたことを示すものであろう。

⑩ 原島礼二氏も七世紀前半に皇陵の治定・記録化が成されたと推定し、このような皇陵にみられる変化は皇権に関わる制度的整備と一連の改制であると指摘している〔倭の五王とその前後』一九七〇〕。

⑪ この関係は飽くまで家形石棺のあり方のみからの推察である。また、蘇我氏が南大和型と密接な関係があつたとしても、最初から「私的な石棺」であつたのかどうかという問題、あるいは、蘇我氏の権勢が強い段階で、二つの「型」の使い分けがどのようになっていたのかといった問題は明らかでない。また、播磨型が加古川流域に非常に数多く存在する点については、播磨型における刳抜式・組合式、あるいは大型・小型といった細分とその使い分けなどをより深く検討しなければならぬだろう。その場合、加古川流域では播磨型の多くが石棺仏として利用されている点に大きな困難があるが、畿内の他地域に比べて、播磨型がより多く利用されていた京都盆地北部の状況が参考となるだろう。

五 結 語

家形石棺は畿内の古墳時代後期における普遍的な遺物の一つである。本稿はその家形石棺を「型」として捉え、各「型」の関係を追求することのなかに六・七世紀における畿内豪族層の政治的関係を捉えようと試みたものである。その結果、以上の考察より明らかになつた点をつぎに要約すると、

一 畿内の家形石棺は「三輪型」、「南大和型」、「葛城型」、「山畑型」、「播磨型」の五つの「型」と、「九州刳抜式石棺群」、「東大和組合式石棺群」、および「石川右岸組合式石棺群」の三つの「石棺群」として捉えることができる。そして、

東大和組合式石棺群は三輪型の変移したものと推測し、石川右岸組合式石棺群は、本来は南大和型と一セットを成すものであるが、階層的な石棺の使い分けにより生じた一群と理解する。また、九州劔拔式石棺は九州よりもたらされたものと考えられる。

二 ここである「型」とは各家形石棺を型式、石材、分布地域等より分析した結果導き出されたものであり、各要素が有機的に結合した一つの個性をもつ石棺群をさすのであるが、それは各「型」が特定地域において、特定の畿内豪族層のもとに、特定の石工集団によって製作されたことを示すものと理解される。したがって、「型」の動向には石工集団、およびそれを支配した豪族層の動向が直接的、間接的に反映しているものと考えられる。なお、「石棺群」としたものは石棺型式が不詳なことより、あえて「型」としなかったものである。

三 そこで、畿内の家形石棺の動向を「型」、および「石棺群」の動向として捉えてみると、そこには三つの画期を指摘することができる。すなわち、①五世紀後半における畿内での家形石棺の発生、②六世紀前葉における畿内各地域での家形石棺製作の開始、および、③六世紀末ないし七世紀初頭における畿内の家形石棺の斉一化の始まりである。

四 畿内における家形石棺の発生に関しては、奈良盆地の東部で二上山石材を用いて製作が開始されはじめた舟形石棺が、九州劔拔式石棺の影響下、家形石棺へと形態変化をとげたと考える。

五 第二の画期は、このようにして畿内の一部で製作され始めた家形石棺が畿内の各地で製作されだし、完全に前代の長持形石棺に取って代わる点に意義があり、そこに政治的な変革を見る。そして、六世紀代における各「型」がいずれも畿内の一地的な石棺としてあり、しかもその間に石棺型式の独自性がみられる反面、利用しえた石材の上には量的な差があることなどから、石棺型式というかたちでは、はじめて個性を表現しだした各豪族が畿内の各地域で分立しているが、彼らの間には石材の量的な差として窺えるある種の政治的秩序があったと考える。

六 第三の画期は、畿内の石棺型式が南大和型と播磨型とによって斉一化され出し、他の「型」が姿を消して行く現象

をさし、それは両「型」に共通の石棺型式が全国的規模で通用する「公的な石棺型式」としての性格を獲得するようになったためではないかと推定する。したがって、ここでは前段階における豪族層のあり方が南大和型と播磨型両勢力のもとに止揚・統合されて行くものと理解する。そして、そこに大化改新を経て律令体制へと上り詰める歴史の一側面をみる。

本稿の大筋は以上のごとくである。したがって、古墳時代の豪族層それぞれに固有の性格を反映している考古学的遺物がきわめて少ないなかで、家形石棺は「型」として捉えることにより、その後後に固有名詞をもつ特定豪族の存在を推定しえること、それゆえに「型」の動向を追求することは当時の畿内の政治的状况を窺う上できわめて有効な手段であることを明らかにしえたと考える。

ただ、考古学的資料のみからする追求では、具体的な歴史の復原にあくまで大きな制約があり、その点で多くの不満が残されたものと思う。したがって、本稿ではその欠を補うためにできるだけ考古学的方法で各「型」の性格やその関係の仕方について言葉を費やしたつもりである。しかし、石材処理技術や工人集団の問題など論じ残した点も多く、それらについては後日を期したい。

謝辞

小稿は京都大学大学院に提出した昭和四九年度修士論文の一部を書き改めたものである。論文作成にあたっては、小林行雄、樋口隆康両先生から有益な御指導と御教示をうけた。また、資料の収集においては、東大阪市郷土博物館藤井直正館長、原田修氏、同市遺跡保護調査会福永信雄氏らのお世話になり、特に原田氏には第4図6・高安大窪石棺の原図を提供していただいた。日本史研究会古代史部会をはじめ各研究会での発表に際しては、都出比呂志、野上丈助、福岡澄夫、吉川義彦氏らのお世話になった。なお、今回、小稿をまとめるにあたっては、小林先生より文章表現から図版の作製に至るまで、大変有益な助言をうけたのをはじめ、岡内三真、中村友博氏ら考古学研究室の諸兄より多大の援助をうけた。記して感謝の意を表します。

引用文献（アイウエオ順）

- 〈1〉 赤松啓介 一九六五 「印南地方石工業の構造とその展開」『阿弥陀古墳群』〔高砂市文化財調査報告〕二
- 〈2〉 浅野清・河原純之・藤沢一夫・山本昭 一九六八 「河内高井田鳥坂寺跡」〔大阪府文化財調査報告書〕一九
- 〈3〉 網干善教 一九五六a 「磯城郡大三輪町管中宇南浦馬塚古墳」『奈良県史蹟名勝天然紀念物調査抄報』八
- 〈4〉 網干善教 一九五六b 「古墳時代の文化と遺跡」『二上村史』
- 〈5〉 網干善教 一九五七a 「古墳時代の文化と遺跡」『葛村史』
- 〈6〉 網干善教 一九五七b 「兄川底古墳」『奈良県文化財調査報告』（埋蔵文化財編）一
- 〈7〉 網干善教 一九五八 「古墳時代の文化と遺跡」『大和高田市史』
- 〈8〉 網干善教 一九五九 「大和三輪狐塚古墳について」『古代学』八一—三
- 〈9〉 網干善教 一九六一 「御所市古瀬『水蓮華文石棺古墳』及び『水蓮塚穴古墳』の調査」『奈良県史蹟名勝天然紀念物調査抄報』一—四
- 〈10〉 網干善教・河上邦彦・奥田豊 一九六八 「奈良県高市郡明日香村坂田都塚古墳調査報告」『関西大学考古学研究年報』二
- 〈11〉 天沼俊一 一九一三 「稲宿の石槨及石棺・水蓮の石棺・兜塚の石棺・西ノ山石棺」『奈良県史蹟勝地調査会報告書』一
- 〈12〉 天沼俊一 一九一四 「火雷神社古墳・艸墓古墳」『奈良県史蹟勝地調査会報告書』二
- 〈13〉 新井喜久夫 一九六六 「古代陵墓制雑考」『日本歴史』二二—二
- 〈14〉 安藤信策 一九七五 「山城の石棺」『京都考古』一—五
- 〈15〉 泉森峻 一九六七 「斑鳩町龍田御坊山発見の環座金具とその類例について」『関西大学考古学研究年報』一
- 〈16〉 泉森峻 一九七三 「奈良県北葛城郡香芝町発見の石棺について」『古代学研究』六七
- 〈17〉 泉森峻・菅谷文則 一九七一 「大和葛城の笛吹・山口古墳群の分布」『古代学研究』六〇

- 〈18〉 逸見吉之助 一九七四 「X線回折法による岩石の同定」『倉敷考古館研究集報』九
 〈19〉 上田三平 一九二七 「菖蒲池古墳」『奈良県に於ける指定史蹟』(『史蹟調査報告』三)
 〈20〉 上田宏範・北野耕平・伊達宗泰・森浩一 一九六二 『大和二塚古墳』(『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』二二)
 〈21〉 梅原末治 一九二二 「河内踏査報告一」『考古学雑誌』三一—
 〈22〉 梅原末治 一九二三 a 「撰津国三島郡耳原村の一古墳」『考古学雑誌』三一—七
 〈23〉 梅原末治 一九二三 b 「河内踏査報告四」『考古学雑誌』三一—一
 〈24〉 梅原末治 一九二四 「山城の古墳墓」『人類学雑誌』二九—二二
 〈25〉 梅原末治 一九二〇 『久津川古墳研究』
 〈26〉 梅原末治 一九二三 「寺戸五塚原付近の古墳」『京都府史蹟勝地調査報告』五
 〈27〉 梅原末治 一九二四 「備前国西高月村の古墳」『歴史と地理』一三一—四
 〈28〉 梅原末治 一九三〇 「中山寺、その境内の古代の遺物・遺跡」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』七
 〈29〉 梅原末治 一九三四 『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』五
 〈30〉 梅原末治 一九三五 『近畿地方古墳墓の調査』一(『日本古文化研究所報告』二)
 〈31〉 梅原末治 一九三六 「周防国三田尻付近の石室古墳」『考古学雑誌』一一—八
 〈32〉 梅原末治 一九三七 『近畿地方古墳墓の調査』二(『日本古文化研究所報告』四)
 〈33〉 梅原末治 一九三八 『近畿地方古墳墓の調査』三(『日本古文化研究所報告』九)
 〈34〉 大阪商業大学考古学研究会 一九七〇 『柏原市太平寺古墳群・生津横尾古墳群実測調査報告』
 〈35〉 大阪府教育委員会 一九六六 『八尾市高安古墳群の調査』
 〈36〉 大阪府教育委員会 一九六八 『八尾市高安群集墳の調査(第二次)』
 〈37〉 大阪府教育委員会 一九六九 『河南町東山所在遺跡発掘調査概報』

- 〈38〉 大阪府教育委員会 一九七〇 『河南町東山弥生集落発掘調査概報』
- 〈39〉 大阪府教育委員会 一九七四 『一須賀古墳群発掘調査概要』一 『大阪府文化財調査概要』一九七三—一九
- 〈40〉 大阪府教育委員会・太子町 一九五八 『松井塚古墳調査概要』
- 〈41〉 笠間太郎・梅田甲子郎・岡崎励 一九五六 「地質」『二上村史』
- 〈42〉 柏原市教育委員会 一九七〇 『柏原市史』（資料編）
- 〈43〉 川勝政太郎 一九五七 『日本石材工芸史』
- 〈44〉 河上邦彦 一九七五 「平群三里古墳の調査」『烏兔』九・一〇
- 〈45〉 川端真治・金関恕 一九五五 「撰津豊川村南塚古墳調査概報」『史林』三八—五
- 〈46〉 岸本準二 一九三二 「南河内郡飛鳥の石棺」『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』三
- 〈47〉 喜田貞吉 一九〇九 「將軍塚付近の古墳に就て」『考古界』八一—三
- 〈48〉 喜田貞吉 一九二二 a 「河内輕墓の掘抜石棺に就て」『歴史地理』一九—二
- 〈49〉 喜田貞吉 一九二二 b 「南河内の珍らしき石棺」『歴史地理』一九—三
- 〈50〉 北野耕平 一九五八 「河内二子塚調査概報」『古代学研究』一九
- 〈51〉 北野耕平 一九六二 「唐櫃山古墳の調査」『大阪府の文化財』
- 〈52〉 京都大学考古学研究会 一九七一 『嵯峨野の古墳時代』
- 〈53〉 京都府教育委員会 一九七二 『京都府遺跡地図』
- 〈54〉 栗山一夫 一九三四—五 「播磨加古川流域に築造されたる古墳及び遺物調査報告」『人類学雑誌』四九—七、八、九五〇
 一、二、五、六
- 〈55〉 小泉顕夫 一九五四 「大安寺字野神古墳発掘見分書」『大和文化研究』二—四
- 〈56〉 神戸古代史研究会 一九七五 「兵庫県下の石棺一」『神戸古代史』二—一

- <57> 小島俊次 一九五五 「奈良県天理市上之庄星塚古墳」 『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』七
- <58> 小島俊次 一九五六 「北葛城郡当麻町当麻樫山古墳」 『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』八
- <59> 小島俊次 一九六五 『奈良県の考古学』
- <60> 小島俊次 一九六九 「割塚古墳の調査」 『青陵』一四
- <61> 小島俊次 一九七一 「野神古墳」 『奈良市史』
- <62> 小島俊次・伊達宗泰 一九五六 『珠城山古墳』
- <63> 小島俊次・北野耕平 一九六〇 「北葛城郡当麻村平林古墳」 『奈良県文化財調査報告』(埋蔵文化財編)三
- <64> 小林行雄 一九五一 「家形石棺」 『古代学研究』四、五
- <65> 小林行雄 一九六一 「中期古墳時代文化とその伝播」 『古墳時代の研究』
- <66> 小林行雄 一九六二 「長持山古墳の調査」 『大阪府の文化財』
- <67> 小林行雄 一九六五 「神功・応神紀の時代」 『朝鮮学報』三六
- <68> 小林行雄 一九六七 「河内松岳山古墳の調査」 『大阪府文化財調査報告書』五
- <69> 小林行雄・樋崎彰一 一九五三 『金山古墳および大籾古墳の調査』(『大阪府文化財調査報告書』二)
- <70> 齋藤優 一九六〇 『足羽山の古墳』
- <71> 佐田茂・高倉洋彰 一九七二 「家形石棺」 『筑後古城山古墳』
- <72> 佐藤小吉 一九二三 「鳥屋古墳」 『奈良県史蹟勝地調査会報告書』一
- <73> 佐藤小吉 一九一四 「赤阪の古墳」 『奈良県史蹟勝地調査会報告書』二
- <74> 佐藤小吉 一九一六 「東乗鞍の古墳・権現堂古墳」 『奈良県史蹟勝地調査会報告書』三
- <75> 滋賀県史蹟名勝天然記念物調査会 一九三六 『滋賀県史蹟名勝天然記念物調査概要』
- <76> 島田暁 一九五六 「北葛城郡当麻村当麻茶山古墳」 『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』八

- 〈77〉 島田貞彦 一九二六 「山城国乙訓郡大原野村発見の陶棺と其遺跡につきて」『歴史と地理』一八一—四
- 〈78〉 清水真一 一九七一—二 「奈良県天理市龍王山古墳群の問題Ⅰ・Ⅱ」『古代学研究』六二、六三
- 〈79〉 清水真一 一九七五 「奈良県天理市龍王山古墳群の問題Ⅲ—補稿篇」『古代学研究』七五
- 〈80〉 白石太一郎 一九六六 「畿内の後期大型群集墳に関する一試考」『古代学研究』四二・四三
- 〈81〉 白石太一郎 一九七三 「岩屋山式の横穴式石室について」『論集終末期古墳』
- 〈82〉 白石太一郎・前園実知雄 一九七一 『真美ヶ丘団地予定地内所在遺跡昭和四五年度発掘調査概報』
- 〈83〉 白石太一郎・前園実知雄 一九七二 『真美ヶ丘団地予定地内所在遺跡昭和四六年度発掘調査概報』
- 〈84〉 末永雅雄 一九六一 『日本の古墳』
- 〈85〉 関野貞 一九二五 「法隆寺堂塔の基壇に使用せられたる凝灰岩椽石材に就て」『考古学雑誌』一五—七
- 〈86〉 高橋健自 一九一三a 『考古学』
- 〈87〉 高橋健自 一九一三b 「河内における一種の古墳」『考古学雑誌』四—四
- 〈88〉 高橋美久二 一九六九 「堀切横穴発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』
- 〈89〉 田代克巳 一九六六 「大阪府茨木市見付山古墳」『日本考古学年報』一四
- 〈90〉 伊達宗泰 一九五六 「北葛城郡河合村佐味田字小墓高塚古墳」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』八
- 〈91〉 伊達宗泰 一九六〇a 「大三輪町穴師珠城山二号墳・三号墳」『奈良文化財調査報告』（埋蔵文化財編）三
- 〈92〉 伊達宗泰 一九六〇b 「桜井市栗原越塚古墳」『奈良県文化財調査報告』（埋蔵文化財編）三
- 〈93〉 伊達宗泰・岡幸三郎・菅谷文則 一九七二 「烏土塚古墳」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』二七
- 〈94〉 田辺昭三 一九六六 『陶器古窯址群』一（『平安学園研究論集』一〇）
- 〈95〉 坪井清足 一九六一 「墓制の変貌」『世界考古学大系』四
- 〈96〉 坪井良平 一九一三 「大和国笛吹社の古墳」『考古学雑誌』三一—七

- 〈97〉 堤圭三郎・高橋美久二 一九六八 「向日丘陵地周辺遺跡分布調査概要」 『埋蔵文化財発掘調査概報』
 〈98〉 奈良県立橿原公苑考古博物館 一九七一 『大和考古資料目録』一
 〈99〉 西川宏・今井堯・是川長・高橋護・六車恵一・潮見浩 一九六六 「瀬戸内」 『日本の考古学』四
 〈100〉 西崎辰之助 一九一三 「宮塚古墳・都塚古墳」 『奈良県史蹟勝地調査会報告書』一
 〈101〉 西崎辰之助 一九一六 「條の古墳」 『奈良県史蹟勝地調査会報告書』三
 〈102〉 西谷正 一九六五 『大阪府高槻市服部塚脇古墳群』 『高槻市文化財調査報告書』(一)
 〈103〉 浜田耕作 一九三七 『大和島庄石舞台の巨石古墳』 (『京都大学文学部考古学研究報告』一四)
 〈104〉 浜田耕作・梅原末治 一九二三 『近江国高島郡水尾村の古墳』 (『京都大学文学部考古学研究報告』八)
 〈105〉 東大阪市遺跡保護調査会 一九七四 『上四条小学校内山畑四八号墳』
 〈106〉 東大阪市教育委員会 一九七三 『山畑古墳群』一 (『東大阪市文化財調査報告書』二)
 〈107〉 樋口清之 一九二八 「奈良県柳本町付近の横穴古墳群」 『考古学雑誌』一八一―八
 〈108〉 樋口隆康 一九六一 「京都嵯峨野広沢古墳」 『京都府文化財調査報告』二二
 〈109〉 久野邦雄 一九七二 「ツボリ山古墳」 『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』二七
 〈110〉 藤井直正 一九六六 「考古資料―古墳時代」 『枚岡市史』三
 〈111〉 藤沢一夫 一九六二 「松井塚古墳の調査報告」 『大阪府の文化財』
 〈112〉 藤沢長治・小野山節 一九六一 「京都大枝福西古墳」 『京都府文化財調査報告』二二
 〈113〉 間壁忠彦 一九七五 a 「石棺石材の産地推定と石棺の分布」 『古代学研究』七五
 〈114〉 間壁忠彦 一九七五 b 「石棺石材についての補訂」 『古代学研究』七六
 〈115〉 間壁忠彦・間壁霞子 一九七四 a 「石棺石材の同定と岡山県の石棺をめぐる問題」 『倉敷考古館研究集報』九
 〈116〉 間壁忠彦・間壁霞子 一九七四 b 「岡山県丸山古墳ほか長持形・古式家形石棺の石材同定」 『倉敷考古館研究集報』一〇〇

- 〈117〉 間壁忠彦・間壁霞子 一九七五。『長持形石棺』『倉敷考古館研究集報』一一
- 〈118〉 松下進 一九七一 『日本地方地質誌近畿地方』
- 〈119〉 丸山竜平 一九七一 「近江石部の基礎的研究」『立命館文学』三二二
- 〈120〉 水野清一・小林行雄 一九五九 「家形石棺」『図解考古学辞典』
- 〈121〉 水野正好 一九七〇 「群集墳と古墳の終焉」『古代の日本』五
- 〈122〉 武藤誠 一九三二 「石室殿」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書』九
- 〈123〉 本山村誌編纂委員会 一九五三 『本山村誌』
- 〈124〉 森浩一 一九五八 「大阪府堺市百舌鳥四五号墳」『日本考古学年報』七
- 〈125〉 森浩一 一九七三 『古墳』
- 〈126〉 八木莛三郎 一八九九 『日本考古学』(後編)
- 〈127〉 安田博幸・白石太一郎 一九七二 「高松塚古墳の漆喰について」『壁画古墳高松塚』
- 〈128〉 山本清 一九六六 「割竹形・舟形系の石棺」『山陰文化研究所紀要』七
- 〈129〉 山本清 一九七〇 「家形系の石棺」『山陰文化研究所紀要』一〇
- 〈130〉 吉井良秀 一九一三 「撰津国武庫郡岡本村の小石棺に就いて」『考古学雑誌』三一一一
- 〈131〉 龍谷大学文学部考古学資料室 一九七二 『南山城の前方後円墳』(『龍谷大学文学部考古学資料室研究報告』一)

(京都大学大学院生・)

The House-shaped Stone-coffins 家形石棺 in *Kinai* 畿内

by

Seigo Wada

The house-shaped stone-coffins are well found in *Kinai* in the later old mound 古墳 periods. In this article, I analyse them as to the type, material, geographical distribution and so on, classify them into some distinctive groups or types which have common elements, and by examining the mutual relations of them, I investigate the political movements of the dynasties of *Kinai*.

According to my examination, the house-shaped stone-coffins were classified to five 'types', and three 'groups', and their history had three turning points as follows, (1) the emergence of them at the east part of *Nara* basin 奈良盆地 in the second half of the fifth century, (2) the beginning of producing of them at every part of *Kinai* in the first half of the sixth century, and (3) the beginning of the uniformization of them from the end of the sixth century to the first decades of the seventh. Therefore, investigating the mutual relations of the types at every period, and pursuing the meaning of the relations, this article concludes that the change of the house-shaped stone-coffins reflected, in the aspect of the funeral ceremony, the political movements of those days from the reign of empress *Suiko* 推古 and the *Renovation of Taika* 大化改新 unto the *Ritsuryo* 律令 regime.

Die Rinden-landwirtschaft und der Yaki-betrieb

vom 8. bis zum 10. Jahrhundert

—Eine Voraussetzung zur Entstehung des
mittelalterlichen Grundbesitzes—

von

Hiromu Hatai

In den landwirtschaftlichen Urkunden, die im Archiv "*Heian Ibun*" 平安遺文 aufgenommen werden, finden wir oft das Wort "*Rinden*" 林田 als das Flächenmaß der Flur. "*Rinden*" kommt ursprünglich von der